

「家庭と幼稚園・小学校との連携による、  
幼児英語活動プログラムの開発」

平成 19 年度『千代田学』事業プロジェクト報告書

大妻女子大学短期大学部英文科

井上 美沙子

守田 美子

池頭 純子

丸山 協子

平成 20 年 3 月



「家庭と幼稚園・小学校との連携による、  
幼児英語活動プログラムの開発」

平成 20 年度『千代田学』事業プロジェクト報告書

大妻女子大学短期大学部英文科

井上 美沙子

守田 美子

池頭 純子

丸山 協子

平成 20 年 3 月



## 謝辞

この千代田学プロジェクトは、昨年度に引き続き今年度で2年目となります。今年度も多くの方々のご協力をいただきました。ここに謹んでお礼と感謝をさせていただきます。

まず、このプロジェクトを採択し、その後もレクチャーシリーズ等の度に、広報掲載やケーブル TV 放映、当日の取材、プレスリリース等で支援して下さった、千代田区政策経営部企画財政課・広報広聴課、及び、このプロジェクトの主旨にご賛同くださり、モデル教育機関との仲介の労を取ってくださる、千代田区教育委員会、教育指導課に深く感謝させていただきます。

千代田区立お茶の水幼稚園・小学校の皆様には、期間中、深くお世話になりました。校長兼園長の海東元治先生、及び副校長 関哲也先生、副園長 深沢美智子先生には、いつも暖かいご協力とご理解を頂き、感謝に堪えません。

幼稚園や小学校の担任の先生方、ご協力いただいた園児や児童の保護者の皆様にも、懇談会や授業参観などで、貴重なコメントをいただき、またアンケート等にもいつも快くご協力いただきました。また、可愛らしいお茶の水幼稚園の園児の皆さんと元気なお茶の水小学校1年の児童の皆さんは、いつも私たちのデモ授業を楽しみにしてくれました。本当にありがとうございました。

本プロジェクトは今年度、日本私立学校振興・共済事業団より平成19年度「地域の子育て・ものづくり支援」（知の拠点としての地域貢献支援メニュー群）事業としても認められました。国内外での学会発表等としては、武蔵野学院大学で開催された国際幼児教育学会第28回大会や、マレーシアのペタリンジャヤ・ヒルトンホテルにて開催された国際学会 IMCICON 2008 における発表では、聴衆の方々から貴重なコメントや励ましをいただきました。年度末に開催された千代田さくら祭りのさくら茶フェスティバル 2008 での千代田学事業報告発表では、石川雅巳千代田区長にも聞いていただきました。

また大妻学院と大妻女子大学短期大学部の英文科の諸先生方に感謝申し上げます。英文研究室の助手の皆さんにはいつも快く協力をしていただき、さまざまな雑務を一手に引き受けていただきました。とりわけ助手の森本浩子さんには昨年度に引き続き、会計処理や雑務を一手に引き受けていただきました。大妻女子大学情報メディアセンターには、教材製作等でいつもお世話になりました。ここに感謝の意を表させていただきます。

最後になりますが、昨年度プロジェクトの研究員であった、山下榮先生が昨年3月にガンでお亡くなりになりました。先生がいらっしやらなかったらこのプロジェクトを立ち上げることはできませんでした。最後までこのプロジェクトを支えてくださったことを心より感謝すると共に、謹んでご冥福をお祈りさせていただきます。

井上 美沙子

守田 美子

池頭 純子

丸山 協子



## 目 次

0	活動報告	1
0.1	教育機関と家庭の連携による、次世代育成支援	1
0.1.1	概要	1
0.1.2	英語活動プログラム	2
0.1.3	アセスメント	4
0.1.4	成果発表	4
0.2	大学と地域の連携による、次世代育成支援	5
1	英語の絵本を通して養う子供の『異文化意識』	9
1.1	はじめに	9
1.2	「千代田学」プロジェクト	9
1.3	就学以前の子供による外国語学習の目的	9
1.4	絵本と異文化意識 (Intercultural Awareness)	14
1.5	むすび	15
2	千代田区立お茶の水幼稚園における実践報告	17
2.1	はじめに	17
2.2	活動の内容	17
2.3	アンケート	19
2.4	まとめ	20
3	千代田区立お茶の水小学校における実践報告と大妻女子大学の 授業との連携	21
3.1	はじめに	21
3.2	小学校での実践の様子	21
3.3	大妻女子大学での事業との連携	24
3.4	アンケート	25
3.5	まとめ	26

付録 1 : 園児・児童のアセスメント結果及び、保護者アンケートの結果

1	幼稚園児のアセスメント結果（個人面談による）	28
2	園児保護者アンケート結果（一回目）	31
3	園児保護者アンケート結果（二回目）	34
4	小学校児童のアセスメント結果（個人面談による）	36
5	児童保護者アンケート結果（一回目）	39
6	児童保護者アンケート結果（二回目）	43

付録 2 : 千代田学レクチャーシリーズ

1	レクチャーシリーズ 1	46
	「親から子どもへ ～英国での子育てと絵本の読み聞かせ～」	
2	レクチャーシリーズ 2	48
	「メキシコ・アメリカで経験した親子の触れ合い」	
3	レクチャーシリーズ 3	50
	「インドでのお親子の触れ合いと子育て事情」	
4	レクチャーシリーズ 4	52
	「現代に生きる「ハムレット」」	

# 0 活動報告



## 0. 活動報告

平成 18 年度「千代田学」事業プロジェクト、次世代育成支援参加プランとして認可され、平成 19 年度で 2 年目を迎えた、本プロジェクト「家庭と幼稚園・小学校との連携による、幼児・児童英語活動プログラムの開発」では、地域における本学、大妻女子大学短期大学部英文科が、どのように貢献できるかを考えた上で、次の 2 つの形態による次世代育成支援を提案している。

- (1) 教育機関と家庭の連携による、次世代育成支援
- (2) 大学と地域の連携による次世代育成支援

### 0.1 教育機関と家庭の連携による、次世代育成支援

#### 0.1.1 概要

まず、第一番めについては、区内の教育機関において、子供が日頃から身近にいる人々（担任教諭、保護者、友達など）と一緒に英語活動の体験をすることで、人間関係の絆を深めるという試みを行った。これは、本学が英文科ということもあり、区内のモデル幼稚園に英語活動の教材や教授法を提供し、定期的に出向して、デモ授業を行うということで協力することで、次世代育成支援を行うというものである。わかりやすく、図に示すと以下のようになる。

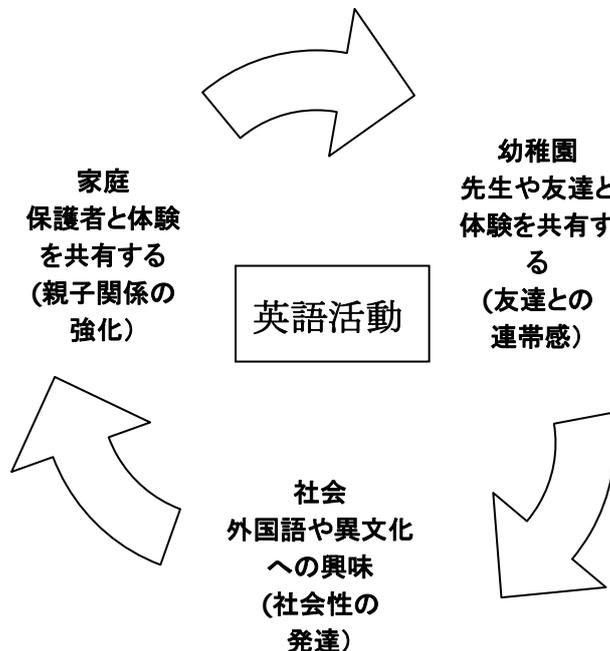


図 1：教育機関と家庭の連携による、次世代育成支援

1年目の平成18年度は、区立お茶の水幼稚園がモデル幼稚園となった。2年目の平成19年度は、モデル教育機関が区立お茶の水幼稚園と区立お茶の水小学校に拡大されて、幼稚園児と小学校1年生にデモ授業と教材提供が行われた。プロジェクトは山下榮研究員の逝去に伴い、新しく池頭純子と丸山協子が共同研究者として加わり、事業に参加することとなった。

英語活動プログラムの提供も2年目に入り、本プロジェクトの成果は国内外の学会等で発表された。今年度は特に、公立幼稚園における英語活動の意義を子供の「異文化意識」(intercultural awareness)の発達と捉え、これを将来的な差別やいじめ防止対策と考える本プロジェクトの主張が発表され、聴衆の幅広い同意を得た。

また本プロジェクトは今年度、日本私立学校振興・共済事業団より平成19年度「地域の子育て・ものづくり支援」(知の拠点としての地域貢献支援メニュー群)事業としても特別補助を受けた。これは地方公共団体や地元産業界と連携して、子育てに関わる地域貢献を目的とした研究プロジェクトに対して行われるもので、千代田区と当プロジェクトが行っている次世代支援に対する姿勢が大きく評価されたものと考えられる。

家庭での英語活動を更に支援するための第一歩として、大妻女子大学短期大学部英文科内に小規模ながら「リソース・センター」が開設され、幼児や児童英語教育活動に有益な絵本やCDなどの教材が集められた。これらの教材は元来大学が所蔵していたものに加え、上に述べた日本私立学校振興・共済事業団よりの補助によって追加されたものから構成されている。今後はこれらのリソースをより充実させていくと共に、興味を持つ区民が情報を得ることができるような方向を探っていきたい。

また今年度は、このプロジェクトを機縁として、お茶の水小学校における本プロジェクトとは別の英語活動に、本学短期大学部英文科の学生が毎月2名、アルバイトで英語指導の手伝いに行くこととなり、微力ながら大学と地域の連携活動に貢献した。第4節では従って、小学校での英語活動の実践報告だけでなく、それをどう大学での児童英語教育の授業と連携させられるかについてレポートしている。

### 0.1.2 英語活動プログラム

夏休みをはさんで3回ずつ、年間で6回のモデル授業を、幼稚園2クラス、及び小学校1年生2クラスに対して行った。授業は研究員2人が受け持ち、幼稚園は2クラス合同で、小学校はクラス別に各30分程度行われた。その後、幼稚園と小学校それぞれの学級に一組ずつ、その月の教材とCDが置かれ、一ヶ月間自由にアクセスができるようにし、また学級生活のさまざまな場面でとりあげてもらおうよう依頼した。また協力家庭には同じ教材セットが無償配布され、家庭でも英語に家族で触れられるようにした。それぞれの園児、

児童の数は以下の通りである。

教育機関	クラス	園児・児童数	協力家庭園児・児童数
お茶の水幼稚園	4歳児クラス	4	2
	5歳児クラス	11	6
お茶の水小学校	1年1組	25	6
	2組	25	6

今年度使用した英語教材は以下の通りである。基本的には幼稚園、小学校共通の絵本を用いたが、授業の中で、例えば幼稚園児には、動物などの身近な事物の名前や数表現などに重点を置き、小学生児童には、前置詞や状態表現などより高度な文法事項や構文などにより多く時間を割くようにした。また幼稚園児であっても、昨年度から本プロジェクトの英語活動に触れている子供もかなりいるので、全体的に昨年度よりもやや難易度の高い教材を選んでいく。ただし小学生児童であっても、初めて英語に触れる子供もいるため、学習経験がなくても理解に支障がないように配慮してある。各授業での実際の様子や子供たちの反応については、第3節及び第4節の実践報告を参照していただきたい。

日付	項目	使用教材	重点項目
1	5月 モデル授業	M. Butterfield & R. O'Neill, <i>Peek-a-Boo!</i> Scholastic	Where 構文 前置詞
2	6月 モデル授業	E. Hill, <i>Spot Can Count.</i> Puffin Books	数 (1-10)、物の数え方 動物の名前
3	7月 モデル授業	D. McKee, <i>Elmer's Opposites.</i> Andersen Press	動物の名前 状態表現、形容詞
4	10月 モデル授業	E. Carle. <i>Today is Monday.</i> Puffin Books	曜日 食べ物の名前
5	11月 モデル授業	J. Lodge. <i>Knock! Knock! Mr Croc.</i> Hodder Children's Books	時間の表し方 時間の尋ね方
6	12月 モデル授業	R. Scarry. <i>I Am a Bunny.</i> Golden Books	季節の名前 I like to ~の表現法

音声教材については、毎月の絵本を英語母語話者に朗読してもらい、効果音などを付けてオリジナルのCDを作成した。大学内で制作したため、市販されている音楽CDに比べてどうしても音質が良くなかったり、また協力家庭のCDプレーヤーと相性が良くないとうまく作動しなかったりといった不具合が多少あったのが残念だったが、音声教材の付属した絵本となると種類が限られ、また協力家庭に無償配布するのに予算が限られてしまうこ

とがあるので、著作権の心配のないオリジナルのCDを学内で作成せざるをえなかった。

### 0.1.3 アセスメント

協力家庭の保護者とは、年2回、懇談会を開催し、さまざまな意見やコメントを出してもらった。またアンケートに回答をお願いした。アンケート結果は巻末に掲げてある。各懇談会の日時と参加人数は以下の通りである。

懇談会種別	日時	場所
幼稚園（第1回）	H19/ 7/18 9:00－ 9:30	お茶の水幼稚園
幼稚園（第2回）	H19/12/17 13:30－14:00	お茶の水幼稚園
小学校（第1回）	H19/ 7/10 14:30－15:00	お茶の水小学校
小学校（第2回）	H19/12/11 14:40－15:10	お茶の水小学校

協力家庭の園児・及び児童に対してのアセスメントは、プログラム終了後に個別面談を行い、インタビューによっていくつかの質問に答えてもらうようにした。幼稚園のインタビューは、平成19年12月17日12:30－13:30、小学校のインタビューは平成19年12月19日13:00－14:00に行われた。いずれも研究員が幼稚園や小学校に出向き、用意された部屋に一人ずつ子供に入ってきてもらい各人5分程の面談をした。インタビューの質問結果は巻末に掲載してある。また幼稚園の担当教諭とも懇談の場を設定し、幼稚園での子供たちの反応や幼稚園の先生方から見た教材に対する感想やコメントを伺った。

### 0.1.4 成果発表

平成19年度の学会発表及び事業報告プレゼンテーションは、以下の通りである。

月日	学会・イベント等名称	タイトル
H19/11/11	国際幼児教育学会第8回大会 於：武蔵野学院大学	「公立幼稚園における英語活動の意義」 －英語の絵本がつなぐ保護者や友達との絆－
H20/ 3/17	IMCICON 2008 於：ペタリンジャヤ ヒルトン ホテル（マレーシア）	“Intercultural Awareness of Kindergarteners through English Picture Books”
H20/ 3/30	千代田のさくら祭り さくら茶フェスティバル 2008 内での千代田学事業の報告 於：大妻女子大学	「家庭と幼稚園・小学校との連携による幼児・ 低学年児童英語活動プログラムの開発」

## 0.2. 大学と地域の連携による、次世代育成支援

大妻女子大学千代田学は、家庭と区立教育機関とが連携して行う幼児の英語活動プログラム及び教材を作成し、区民の子育てを支援すると共に、国際人としての素地を養う環境を整えることに貢献することを目的としている。具体的には、前述したように、区立お茶の水幼稚園と併設するお茶の水小学校をモデル教育機関として、英語活動のデモ授業と教材提供を行ってきた。それと共に、子育て支援の一環として、家庭での幼児英語活動を支援する、内外の知識人を招いた講演活動や国際的イベントを開催し、区民に無料開放してきた。これは千代田区民のみに限らず、近い将来次世代を担うべき区内で勉強をしている大学生や社会人にも開放し、地域社会への貢献ということも、目的のひとつとしている。

元来大学における教育研究の成果を直接社会に開放し、地域住民等に高度な学習機会を提供することを目指して始められた大学の公開講座は平成17（2005）年中央教育審議会答申によるとその時点で20年という歴史を持っている。本学の大妻女子大学も千代田・多摩・狭山の3キャンパスによる大妻女子大学公開講座を平成3（1991）年より始めているが、本プロジェクト研究員が所属する大妻女子大学短期大学部英文科は、平成12（2000）年頃より大学と地域社会との交流に関心を寄せ、10数年にわたり、同じ千代田区内に隣接する英国大使館との文化的国際交流を継続してきている。

### 英国大使館と大妻女子大学との1996年からの文化的国際交流

1. 大妻女子大学公開講座 1996年11月9日  
公開講座のテーマ「午後の紅茶と文学と—大英帝国の詩学」にちなみ“アフタヌーンティー”についての講演と実演パーティー  
講師 Wendy Wyver 氏（英国大使館二等書記官、政治部）
2. 大妻女子大学短期大学部英文科 現代英語演習（1年次必修）授業時間  
1997年12月20日  
ゲストスピーカー Wendy Wyver 氏（英国大使館二等書記官、政治部）  
英国の文化・文学及び大学生活についての講演
3. 大妻女子大学短期大学部英文科集中講座 2001年9月17日～20日  
授業科目「英米文学特別講義『英文学の背景としての文化』文学をより理解するために」  
講師  
1日目 Ms. Mara Myers  
Second Secretary, Political Section（英国大使館二等書記官、政治部）  
Theme: UK domestic politics

2 日目 Mr. Richard Jones

First Secretary, Trade and Investment

(英国大使館一等書記官、対英投資部)

Theme: UK-Japan trade and business relationship

3 日目 Mr. Simon Brown

Second Secretary, Political Section (英国大使館二等書記官、政治部)

Theme: UK and Japan as partners in foreign policy

4 日目 Ms. Clare Allbless

Attache, Press and Public Affairs Section

(英国大使館補佐官、報道・外交サービス部)

Theme: Role of the Embassy and UK Diplomatic Service



最終日の講義終了後、受講生 54 名全員が駐日英国大使館を訪問見学

4. 英国大使館合唱団・大妻学院共催「サマー・コンサート」 2002年6月11日  
挨拶 Richard Jones 氏 (英国大使館一等書記官、対英投資部)
5. 英国大使館合唱団・大妻学院共催「サマー・コンサート」 2004年5月28日  
挨拶 Tom Goodwin 氏 (英国大使館一等書記官、貿易政策部)
6. 英国大使館合唱団・大妻学院共催「サマー・コンサート」 2005年6月10日  
挨拶 Tom Goodwin 氏 (英国大使館一等書記官、貿易政策部)
7. 大妻女子大学英文学科・短期大学部英文科校外授業 (駐日英国大使館訪問研修)  
2005年10月20日  
講師 Tom Goodwin 氏 (英国大使館一等書記官、貿易政策部)  
日英関係の歴史と大使館の役割についての講義



8. 英国大使館・大妻学院共催「ローナン・マギル ピアノ・サマーコンサート」

2006年6月10日

挨拶 Alastair Morgan 氏（英国大使館、対英投資ディレクター）

9. 大妻女子大学「千代田学」レクチャーシリーズ1

講師 Alastair Morgan 氏（英国大使館、対英投資ディレクター）

「親から子に伝える英文学の伝統-イギリス家庭における子育てと絵本」についての講演

※2007年6月2日には、ブリティッシュ・カウンシル後援 大妻女子大学・千代田学共催によるローナン・マギル ピアノ・サマーコンサートが大妻講堂にて開催され約600名の聴衆を集め、地域社会の人々との国際交流に貢献した。

10. 英国大使館・大妻学院共催「サマー・コンサート」 2008年6月7日（予定）

UK-Japan 2008 のイベントのひとつとして開催。

UK-Japan 2008 とは、2008年が日英修好条約調印150周年にあたり、日英のパートナーシップが今後も引き続き発展することを願って、芸術・科学技術・クリエイティブ産業の分野における英国を紹介する様々な活動のプロジェクト実施を予定している。

大妻女子大学短期大学部英文科に地盤を基本的においている当プロジェクトは、上述された表が示しているように、平成8（1996）年における大学公開講座を発端として、平成17（2005）年に至るまでの経験を基として、「大妻女子大学千代田学」プロジェクトとしてのレクチャーシリーズ、そして文化的催物の企画と実施を行うことができたといえよう。こうした活動は小さな試みではあるが、今後も継続をしていくことにより、自治体と大学の連携による次世代育成支援のひとつのモデルケースとなることを願っている。

千代田学レクチャーシリーズ及びイベントについての18年度、19年度実施の詳細、プレスリリースの内容と聴衆の感想を資料として添付する。



# 1 英語の絵本を通して養う子供の 『異文化意識』



## 1. 英語の絵本を通して養う子供の「異文化意識」<sup>1</sup>

### 1.1. はじめに

本論文では、就学以前の幼児が英語を学習する際の最終目標は、Brewster, Ellis and Girard (2004) が説くところの3つの目標の中の「心理学的」または「言語学的」な準備よりも「文化的準備」(cultural preparation) に置くべきであることを主張する。幼児の生活に英語を導入することは、他言語やその話し手に興味を抱かせるように刺激するだけでなく、異なる言語や文化に対して敬意を払い、それらに対して肯定的な態度を示す手助けになると考える。議論の根拠は、東京都千代田区から基金援助を受けている我々の研究プロジェクト「千代田学」で得たデータに基づいている。ここでは幼稚園児に英語の絵本を与え、家と幼稚園で、親や教師と共に週3回以上読ませることを6ヶ月間続けるという試みを行った。

被験者の子供たち、親、教員たちとのインタビューを通じて、この方法が子供たちが「異文化意識」(intercultural awareness) を発達させることに役立つ可能性があるという結果が得られた。

### 1.2. 「千代田学」プロジェクト

本論文でのデータは、2006年から2007年にかけて行われた千代田区立お茶の水幼稚園で集められた。

毎月その月の絵本と付属CDが選ばれ、我々はそれを使って4歳児、5歳児を対象に英語の授業を行う。園児は本を読み、CDを聞いて簡単な英語のフレーズや表現を学習したり、ストーリーの内容に関連した歌を歌ったりゲームをしたりする。それから園児たちは、幼稚園の担任教諭と共に週3回程、CDを聞いたり、一緒に絵本を読んだりする。一部の園児たちは同じ絵本とCDを与えられ、家で家族と一緒に週に2、3回、絵本を読んだりCDを聞いたりする。2007年では、4人の4歳児と11人の5歳児のうち、2人の4歳児と6人の5歳児が家庭学習を受けた。

幼児たちの学習査定は、個人面談、及び保護者や教諭たちとの面接と保護者に対して行ったアンケートの集計によって評価された。保護者や教諭たちとの面談は年に2回行われ、さまざまな子供たちの反応が報告された。子供たちとの面接は、年1回行われ、そこでは会話の中で基本的な英語の知識の習得の有無が検査された。また彼らの外国語や異文化に対する見方についての質問も行われた。

### 1.3. 就学以前の子供による外国語学習の目的

#### 1.3.1 小学生児童の外国語学習の目的

一般的に小学生レベルにおける外国語学習の目的とはどのように捕らえるべきなのだろう

---

<sup>1</sup> 本レポートは、平成20年3月17日に、マレーシアのペタリンジャヤ・ヒルトンホテルにて開催された国際学会 IMCICON 2008 での学会発表に基づいている。

うか？ Brewster, Ellis and Girard (2004) によると、その目的は次の3つに分別されるとされている。

- (1) Psychological preparation
- (2) Linguistic preparation
- (3) Cultural preparation”

(Brewster, Ellis and Girard, 2004, p.5)

子供たちは教育機関においての、将来の外国語学習に備えて、心理的に言語的に、そして文化的に準備をしなければならない。例えば、外国語を学ぶにあたっては心理的に動機づけられていなくてはならないし、外国語は母国語と音も文法も意味も異なっているということに気づいていなくてはならない。またこれらの言語と深く結びついている、外国や異文化の存在を認識していることも必要である。

これらの3つの目的はそれぞれ同じように重要であると考えられるが、社会の状況に応じて、その中のひとつが他よりも優先されたり強調されたりすることがある。一般に、多言語話者になることが当然視されるような多言語社会においては、子供は言語運用能力を将来的に身につけるべく、早くから言語的に動機付けられることが求められるだろう。しかし一方で、日本のようにどちらかというと単一言語社会である国では、外国語学習は、高等教育の一部として位置づけられており、日常生活に不可欠な基礎教育というよりは社会で成功するための手段とみなされる。このような状況下では、言語的準備よりも心理学的準備の方が優先順位が高くなる。

日本では通常13歳から英語学習が学校教育として始められる。英語が国際的なコミュニケーションの手段としてその位置を不動のものにするにつれて、日本における英語教育についてはさまざまな議論がなされている。特に学習を始める時期に関しては、臨界期仮説等を根拠として、小学生のうちから英語教育を学校で行うべきであるという議論がある。しかしながら、英語と日本語の二言語話者を育成するほど十分な「英語」の授業時間を、小学校カリキュラムに導入することは不可能であり、実際に小学校で英語の授業を受けた子供たちが、高校生や大学生のレベルになって、受けなかった子供たちよりも、良い成績を上げているという、統計的に有効なデータはあまり得られていないことから、英語教育開始の低年齢化に否定的な意見も根強い。

従って、日本において、小学校レベルの英語学習の第一目標を「言語的準備」に設定することは実用的ではないことがわかる。実際文部科学省が設定している英語活動の目的は、英語を「楽しむ」ことである。よって、小学校での英語活動の目的は、将来英語が話せるようになりたいと動機付けることであり、すなわち「心理的準備」をさせることとなる。

### 1.3.2 幼稚園児の外国語学習の目的

小学校に英語の授業を導入することが、必ずしも有能な英語話者を育成することにつながるというならば、就学以前の子供を英語に触れさせることにどのような意義がある

といえるのだろうか。

この節では、就学以前の幼児に外国語を教えることは、やはりそれでも意義があるということ論じていく。基本的に前節で論じた、小学生レベルでの外国語学習における3つの目的は、就学以前の幼児の外国語学習においても、通用するように考えられる。しかしながら、小学生レベルでの外国語学習と異なり、我々は、就学以前の幼児の外国語学習にとって、最も重要なのは、「心理的準備」でも「言語的準備」でもなく、「文化的準備」であることを主張し、外国語に触れることによって、幼児が「異文化意識」を発達させていくように、指導者が心を配る必要があるということ論じていく。

#### 1.3.2.1 心理学的準備 (Psychological Preparation)

Brewster, Ellis and Girard (2004) は、心理学的準備には2つの側面があると論じている。すなわち、動機付け (motivation) と目標言語を意識させること (language awareness) である。

学習者を動機付けることは、学習者の年齢が低いほど重要なことであると考えられる。外国語学習は子供たちにとって楽しみにならなくてはならず、重荷にならないように配慮すべきである。また彼らを目標言語に興味を持たせ、自らもっと学びたいと意識させることも重要なことである。

小学校入学以前の子供たちに外国語学習を始める意義が存在するのだとしたら、それは彼らを将来的に目標言語を学習したいという動機付けをしたり、その言語を意識するように導くことだろうか。確かに年齢が低いほど、外国語学習への意欲を動機付けることは容易いと、一般には信じられており、これが昨今の幼児英会話教室の盛況ぶりにもつながっていると考えられる。しかしながら、「千代田学」プロジェクトを通して、我々は幼稚園児が必ずしも個人的に英語を習うことを楽しんでいないことを知った。例えば、2006年の調査では、14人中6人の保護者が、彼らの4歳または5歳の子供が「かつて」英会話教室でレッスンを受けていたと答え、やめた理由は子供がいやがったからだと回答した。

しかしながら英会話教室を嫌がった子供たちも、我々のプロジェクトによる英語活動は好きだとインタビューで答えた。このことから、幼児たちは、友達や保護者、幼稚園教諭らと皆で一緒に行くことは「楽しい」と考える傾向があるように思われる。同じ英語の絵本を幼稚園と家庭で読み、共通の話題とする。英語はお稽古の場で強制されるものでなく、日常生活の中でその延長として自然に導入される。多くの保護者たちは幼児は家庭でも絵本に興味を持続し続けたのは、おそらく幼稚園ですでに友達と読んで、楽しいと感じられる体験を共有したからだと思うと報告した。この事実は、日常生活における仲間学習というものが、就学以前の子供を外国語に興味を持たせるために非常に重要な役割を占めるということを示唆していると考えられる。

まとめると、心理学的な動機付けもまた、就学以前の子供の外国語学習に重要であると考えられるが、この時期の子供たちはレッスンを強制されると嫌がるため、配慮が必要であると思われる。レッスンは子供にとって楽しく、そして日常生活の中で友達と一緒に行

うことができるものであることが望ましい。

### 1.3.2.2 言語学的準備 (Linguistic Preparation)

Brewster, Ellis and Girard (2004) によれば多くの国での小学校レベルの英語学習の主眼目標はコミュニケーション能力の発達であるという。しかしながら、3.1 節で論じたように、これは日本における英語活動の目的としては実用的ではないと思われる。しかしながら、Brewster, Ellis and Girard はまた、学習開始をはじめたばかりの学習者にとっては必ずしもコミュニケーション能力を高めることを重要視するにあたらぬとも述べている。

In the earliest stages, language aims may simply involve getting pupils used to the sounds, rhythm and intonation of English and creating an atmosphere where the child feels able to 'have a go' at speaking a few words in another language with confidence.

(Brewster, Ellis and Girard, 2004, p.8)

3.2.1 節において、心理学的準備は目標言語への意識の覚醒ということが含まれると述べた。外国語を意識した次のステップとして、母国語と異なるその音やリズムに慣れることが、世界におけるさまざまな言語の存在に気づく次のステップであると考えられる。

従って異なる音やイントネーションなどのかぶせ音に慣れるというだけでも、就学前の幼児にとっては外国語学習の目的になりうるといえるだろう。たとえ子どもたちは耳にする文の意味や構造を理解することができなくても、その音やリズムが母国語のそれと異なることを認識することができ、それに親しむだけでもよいと考えられるのだ。

### 1.3.2.3 文化的準備 (Cultural Preparation)

異文化意識 (intercultural awareness) を発達させることも外国語を学ぶ主要目標のひとつと考えられる。学習者は目標言語を学ぶと同時にそれと密接に関わっている文化的側面を学習することになる。しかしながら、小学生レベルでの外国語活動の場合、文化学習は外国語学習の周辺的事項としてとらえられることが多く、前節までで論じた心理学的準備や言語学的準備の方により重点がおかれることが常であると思われる。加えて、異文化意識の発達は、子供の社会的な意識発達とかかわると考えられ、従って外国語のコミュニケーション能力の発達に比してより複雑なプロセスであると考えられる。すなわち「文化」とは「言語」のように聞いたり話したりすることのできない、従ってよりその実体が抽象的であると考えられるのである。

一般に、「文化的準備」という目標は就学以前の子供の外国語学習の目標としてふさわしくないように思われるかもしれない。しかしながら、我々は就学以前の子供たちにとっては、実はこれが最も重要な目的であるべきだと考える。

我々の幼稚園児から得たデータを分析すると、その外国語学習プロセスには 3 段階あるように思われる。絵本を通じて初めて英語に出会った園児たちは、最初は、単に母国語と異なる言語が存在しているというその事実のみに好奇心を抱く。彼らの反応は異なる言語を意識するという、更なる外国語学習に対する「心理学的準備」と考えられ、これをステージ 1 とする。次に園児たちは母国語と異なる英語の音やリズムにより興味を抱く。これは「言語学的準備」とみなされ、ステージ 2 と考えられる。やがて学習時間をある程度経ると、園児たちは、母国語以外の言語はたくさん存在すること、そしてそれらの言語を話す多くの外国人の存在や彼らの住む外国の存在に気づくようになる。これが「異文化意識」の発達であり、ステージ 3 と考えられる。

上に述べた傾向は、我々の 2007 年の千代田学プロジェクトにおける被験者の園児たちの母親に対して行った 2 度のインタビューで観察することができる。母親たちは、子供たちが幼稚園と家で英語の絵本と CD を読んだり聞いたりするという活動を通して、どのように反応し、どのように行動するようになったかについて報告してくれた。下に示す表は彼らのコメントの要約である。

	age	sex	1 <sup>st</sup> interview	2 <sup>nd</sup> interview
Child A	4	boy	<i>He is not so much interested in the books. Actually my three-year old likes them more.</i>	Stage 1 <i>He has noticed that different languages are spoken in foreign countries. He is also curious about English letters.</i>
Child C	5	boy	<i>He just enjoys the books with his younger sister.</i>	Stage 2 <i>He is interested in not only his picture books but also English phrases in his favourite TV animation songs.</i>
Child D	5	girl	Stage 2-3 <i>She wants to say "hello" to non-Japanese on streets.</i>	Stage 2-3 <i>She can use greetings in English, and loves English songs. She is also interested in the fact that there are foreign languages other than English.</i>
Child E	5	boy	Stage 2 <i>He likes to say English words he has learned aloud.</i>	Stage 3 <i>He is interested in not only English speaking people but also other Asian people who speak other languages.</i>
Child F	5	boy	Stage 1 <i>He enjoys the books with his sibling.</i>	Stage 3 <i>He met his cousins from Germany and tried to communicate with them by using all of his limited English.</i>

Child G	5	boy	Stage 1 <i>He does not mind if there are some difficult words or phrases in the books.</i>	Stage 2 <i>He loves pop-up books and enjoyed listening to the CDs every morning.</i>
Child H	5	girl	Stage 1 <i>Reading English books at home is good for communication between her and her sibling.</i>	Stage 2-3 <i>She went abroad on a family trip, and used simple English phrases she knew with confidence.</i>

被験者の園児の数は少ないが、データから幼稚園と家庭において CD 付きの絵本を読むという方法は、目標言語を意識するだけでなく、異文化を意識することを手助けするということが言えるように思われる。

この異文化意識は、日本のような単一言語社会に近い国においては非常に重要であると考えられる。これにより子供たちは異なる言語を話す異なる人々が存在することを知り、それを当たり前の事として認識するようになる。日本では、子供たちは通常母国語以外の外国語に、日常生活の中で圧倒的にさらされたり、外国文化を生身に体験するということはあまりない。サピア・ウォーフの仮説にあるように、我々の思考方法が多少なりとも母国語のよって影響されるというようなことがあるのならば、単一言語共同体においては、人々はお互いに似たりよつたりの行動様式を取る傾向にあることが予測される。一般に人々は他人が自分と違う考え方をしたり異なった行動をされると、時としてそれに不快感や気まずさを感じることもあるものである。しかし、就学以前の子供たちが外国語活動を通して言語や文化の多様性について認識するのであれば、彼らは将来的に異なる言語や文化に対してより肯定的で慣用的な態度を形成していくことになるであろう。よって、異文化意識は、就学以前の子供たちにとってはある意味、実用的な言語スキルの発達よりも、重要であると考えられるのである。

#### 1.4 絵本と異文化意識 (Intercultural Awareness)

「千代田学」プロジェクトでは英語活動に絵本を用いる。この節では前節での幼稚園レベルでの外国語活動の目標は異文化意識の目覚めと発達におくべきであるという主張に基づき、なぜ絵本がこの目標にとって有効なのかを論じていく。

絵本は低年齢の学習者の外国語活動に幅広く教材として利用されており、絵本が心理学的及び言語学的準備に貢献することは否定できないと思われる。すなわち、お話を読むことは子供にとって楽しいことであり、絵本を使って外国語を教えることは子供たちを目標言語をもっと学びたいと動機付けることに役立つからである。多くの場合、絵本の文章はリズムカルだったり簡単なフレーズが効果的に繰り返されたりしていて、子供が外国語特有のリズムやパターンにすぐ気が付くことができるようになっている。

絵本は子供たちが「異文化意識」を養うのにも有効である。子供たちは本を通して何か社会的な体験をしたり多くの異文化情報を得ることができる。ストーリーの中には、子供の成長に役立つようなモラルやメッセージが隠されているものもある。我々が実際に使った絵本の中から一例をあげると、「パープル・モンスター」という絵本では、子供が英語の挨拶表現を学習するようにデザインされているのだが、そこには誰とでも仲良くしようというメッセージがこめられている。ストーリーでは、紫色のお化けが友達を探して皆にハローと呼びかけるのだが、人々は怖がって逃げてしまう。しかし悲しみに沈むお化けは最後に彼を恐れない子供たちに出会い、一緒に楽しく遊ぶことができる。この本を幼稚園児たちに最初に導入したとき、子供たちの中には、紫のお化けは、やはり「お化け」なのだから好きではない、という反応をする子供が何人かいた。しかしながら、何度も本を読むたびに、そういう子供たちも紫のお化けが好きになった。つまりストーリーの中のメッセージを自然に学習したのである。

まとめると、絵本を用いることは就学前の子供による文化的準備のための外国語活動に効果があると考えられる。子供たちはストーリーを通じて社会的・文化的規範やモラルを自然に習得することができる。

### 1.5. むすび

本論文では、就学以前の外国語活動の目標は、単なる将来行われるであろう高等教育レベルにおける外国語学習への単なる準備であってはならないことを論じてきた。このレベルにおける外国語活動の目標は、むしろ言語的能力の発達よりも、言語の多様性と深く結びついた文化の多様性について肯定的な態度を育成するための「異文化意識」の発達に重点を置くべきである。この目標への最初のステップとして、子供たちは心理的に目標言語を受け入れるという準備をし、目標言語を意識しなくてはならない。次に第二段階として、彼らは言語的な準備、すなわち外国語の母国語と異なる音やリズムに慣れ親しまなくてはならない。最後に、彼らは外国語を通して「異文化意識」を発達させ、外国語のみならずそれに付随した文化的側面にも興味を持つように動機づけられなくてはならない。将来的な外国語学習も重要ではあるが、異文化意識の発達もまた、子供たちの認知発達や人格形成にとって非常に重要であると考えられる。

本論文ではまた、絵本を教材として用いる教授法が、この異文化意識を育成するのに役立つことを主張した。絵本はモラルや教訓といったメッセージを内包しており、教室における通常の教授法では伝えにくい抽象的な概念を子供たちに理解させることができる。

### Bibliography

- Brewster, Ellis and Girard. 2004. *The Primary English Teacher's Guide* New edition. Penguin.  
Cameron, L. 2001. *Teaching Languages to Young Learners*. Cambridge: CUP.



## 2 千代田区立お茶の水幼稚園における 実践報告



## 2. お茶の水幼稚園における実践報告

### 2.1 はじめに

御茶の水幼稚園における本プロジェクトは 2 年目を迎えた。本年度プロジェクト研究員のうち 2 名は、昨年に引き続き幼稚園での指導に当たるため、すでに5歳児とは親しく、第 1 回目から子どもたちは大変積極的に接してきた。心待ちにしていた様子で、われわれが園に入ると、早速何人かの子どもたちが“Good Morning!”と英語で挨拶してくれた。新しく加わった2名の指導者も、教室に入る前から子どもたちと、挨拶を交わすことが出来、大変順調なスタートとなった。

第1回目は、直接指導に当たる教員2名と4歳児4名が初めてであったため、やや緊張気味であったが、回を重ねるにつれお互いに慣れ、親しみが増し、楽しく指導が出来るようになった。幼稚園児を対象とするため、なるべく人形などの具体的に認識できる補助教材を使用し、体を使う活動も取り入れるように考慮した。

幼稚園におけるこのプロジェクトの目標は、外国語を通しての「異文化意識」の発達にあるという観点から、一応の言語目標(取り上げる英語の表現)は設定するものの、一緒に「外国語で遊ぶ」という体験を重視した。絵本の中には日常表現が多いため、多くの幼稚園児がすでに知っている単語も多く、すでに知っている単語を基にして、さらに新しい単語や表現を導入することにより、彼らの知的好奇心を満足させながら、更なる外国語への興味へと導くことが出来たように思う。以下に活動の詳細を記す。

### 2.2 活動の内容

第1回目は、まずなれることを目的に、挨拶の表現から始めた。“Good Morning” “How are you?” “I’m fine, thank you”という一連の表現を全員で繰り返し練習し、指導者 2 名が分担して一人ずつと挨拶を交わした。5歳児は昨年の指導で慣れており、スムーズに対応できたが、4歳児は幼稚園自体にもまだ充分には慣れていない状態であり、はにかんでうまく対応できない園児も見られた。

使用した絵本 *Peek-a-Boo* (いないいないばあ)は仕掛け絵本で、女の子が、隠れている動物を探すストーリーになっている。“Where is ~?”という表現が繰り返し使われ、問いかけの後、仕掛けの扉を開けると、探している動物が出てくるようになっている。「いないいないばあ」は子どもたちが生まれた直後から繰り返し聞いてきた表現であり、特に初めてで緊張していた4歳児にとっては、指導員の手振り付きの、外国語での「いないいないばあ」は、「外国語」という高いハードルを越えるのにはうってつけであったように思われる。

幼稚園においては“Where is ~?”という疑問文ではなく、その答えとなる、位置を表す表現にポイントを絞った。指導員2名が各自ぬいぐるみを持ってきて、on, in, behindといった抽象的な表現を、実際の人形で示すことにより、園児の理解を図った。手振りをつけながら“Peek-a-Boo”を繰り返しているうちに園児たちも一緒にやり始めた。ぬいぐるみが園児との距離を縮めるのに一役買い、最後に“Peek-a-Boo”の歌を歌い、30分が終了する頃には、園児たちはすっかり英語の世界に浸っていた。

第2回目に使用した *Spot Can Count* は、邦訳で「子犬のころちゃん」シリーズとしてよく知られているもので、何人かの園児はすでに邦訳のものを読んでいて、邦訳のあるものは、日本語と英語の違いを認識させるのに適した教材で、言語によって代表される文化の違いを認識する手助けとなる。この本は子犬の *Spot* が身の回りの動物の数を数えるという、数字を認識させるものである。各ページに登場する動物は、重なり合ったり、離れていたり、小さかったり、と認識しづらいため、動物の絵を拡大コピーして、マグネットで黒板にはれるようにした補助教材を用意し、ひとつずつ張りながら一緒に数えた。

すべての園児がすでに1から 10 までの数を英語で数えることが出来るため、数の言い方よりも、むしろ正しい発音を意識させるようにした。“Ten Little Indian Boys”の歌を導入し、くりかえし一緒に歌うことで、数字の発音の定着を図った。

第3回目は *Elmer's Opposit* で、*big-small, fast-slow, tall-short* といった、園児が理解するにはやや難しい抽象的な概念を扱った絵本であった。「エルマー」のシリーズも邦訳が普及しており、すでに邦訳で読んでいる園児もいた。この本にも多くの動物が登場し、反対語の抽象的な概念とともに、かめ (*tortoise*)、キリン (*giraffe*) といった、日本語ではなじみがあるが、英語ではあまりなじみのない動物の名前の導入を図った。抽象的な概念であるため、園児に理解してもらう手助けとして、*big-small, tall-short* については体を使って表現することにした。立って腕を伸ばし、爪先立つことで *big, tall* を体感し、身をかがめることで *small, short* を体感させた。長時間じっと座っていることが苦手な年代であり、体を動かしての活動は効果があったといえよう。“Big and Small”という歌を導入し、歌いながら背伸びをしたり、小さくなって楽しんだ。

夏休みを挟んでの第4回目は、*Today is Monday* という、曜日を扱った絵本であった。作者は *Eric Carle* で、これも大変人気のあるシリーズのなかの一冊である。各曜日にひとつずつ食べ物 (スパゲティ、スープ、アイスクリームなど) が登場し、曜日の名前とともに、食べ物の名前も導入した。曜日の名前は、英会話教室等で学習している園児もいたが、大半の園児にとってはなじみが薄く、また発音も難しいことから、*th-(Thursday), f-(Friday)* など、日本人にとって発音が苦手と思われる部分に注意を喚起しながら指導した。曜日の歌をくりかえし歌い、定着を図った。夏休みの間に園児が成長し、夏休み前には消極的であるように思われた年少組の園児たちも、積極的に参加する姿が見られるようになったことは、大きな喜びであった。

第5回目は、*Knock! Knock! Mr. Croc* というワニが主人公の、飛び出す仕掛け絵本で、ワニが朝起きてから昼食をとるまでを、時間の経過を追って描いた作品である。“What's the time?”という表現が繰り返され、8時から 12 時まで1時間ごとにワニの行動を描いている。色が鮮やかな作品で、飛び出すだけでなく目や腕なども動く仕掛けになっており、園児たちに大人気であった。時間の表現が主であるが、“open my eyes”(目を開ける)“brush my teeth”(歯を磨く)といった、園児の日常に直結した表現が登場するので、動作を表す表現もテーマに加えた。“What's the time?”という問いかけを何度か行い、園児に“Eight O'clock”などと答えさせる問答を行った。英会話の教室に行っても、時間の表現になじみのある園児は少なかったようである。動作表現については実際に目

をつぶって、開けながら“open my eyes”と言ったり、歯を磨く動作をしながら“brush my teeth”と言ったりして、楽しみながら表現になじむようにした。

最終回となる第6回は、これまで扱ってこなかったテーマを扱った本ということで、季節を扱っている“I am a Bunny”を取り上げた。絵本が小さかったため、拡大コピーをして、紙芝居のように仕立てた。Nicholas というウサギが春、夏、秋、冬それぞれの季節で好きなものを挙げており、季節の名前とともに、“I like ~”という表現も導入した。好きなものとしては、花や蝶などが挙げられており、それらの名前を入れて、「～が好きです」という園児たちに身近な表現の練習をした。12月でクリスマスが近かったため、園児たちになじみのあると思われる“We wish you a Merry Christmas”の歌を一緒に歌った。歌詞は、一部明確に歌えないところもあったが、大半が同じ歌詞のくりかえしであり、何度もリクエストがあり、手をつないで一緒に何度も歌って楽しみ、今年度の終了とした。園児たちが名残惜しそうな表情を見せてくれ、こちらも別れがたい思いを胸に教室を後にした。

## 2.3 アンケート

幼稚園で7月と12月に行った保護者アンケートの結果は以下に述べる通りである。

### 1) プロジェクトに参加した動機

プロジェクトに参加した動機としては、「子育ての中に積極的に英語を取り入れていきたい」が最も多く50%となっている。5歳児については「昨年に引き続き」という保護者が25%、具体的に「英語を話せるようになってもらいたい」が16%であった。「児童文学、絵本、英米文化に興味があるから」という答えはなく、文化的な要求ではなく、やはり「英語」になじむ、習得することに対する期待が大きいことが分かる。その一方で、「幼児英語教室に通わせたいと思っていたから」という答えもなく、保護者に対する説明が十分に理解され、実際の運用能力の習得に対する期待はないことが分かった。

### 2) 家庭での利用回数

家庭での平均的な教材の利用は7月では「週に1回が2回」最も多く72%、「ほとんど毎日聞いていた」家庭は14%、また「月に1回から2回」は14%であった。12月には「週3回以上」「週1回から2回」「月1回から2回」がともに28-29%となり、「ほとんど使っていない」家庭も14%あった。やはり慣れてくると持続させることが難しいことが伺われるが、それでも半数以上の家庭が週に複数回子供と英語活動を行っていたこととなる。

### 3) 子どもの変化

子どもがこのプログラムを通して変化したこと等については、おおむね良好な回答が寄せられており、特に、このプロジェクトが目的としている「異文化の理解」については大変効果が大きいと考えられる回答が多く見られた。懇談会の席では、記述のほかに保護者一人ずつからコメントをもらったが、英語を含め、異文化、言語の多様性などに「気づいて」きたという報告がなされ、先に述べた

邦訳の本を持っている場合は両者を比較して楽しんだり、身近な英語を話す人に積極的に英語を使用して話しかけようとした、などのコメントも寄せられた。

特筆すべきは、英語と他の言語の違いを認識するようになった、というもので、くりかえし英語の音を聞くことにより、イントネーションや発音の異なる他言語(フランス語、イタリア語、韓国語等)と英語を識別できるようになったということだ。まだ様々な音に対して十分な受容能力のある年代の内に、しっかりと英語の音を入れることが重要であることが伺われる。音に関しては、教材以外の英語の歌についてもまねをして歌う、というコメントもあり、素直に音を受け入れられるこの時期が語学習得の上で大変重要であるといえよう。

## 2.4 まとめ

幼稚園での指導全般については、おおむね所期の目的を達成したといえよう。しかし、実施の方法、教材の選定等については多くの課題が残されている。教材は園に絵本2冊、CD2枚を置かせていただき、昼食の時間などに全員に聞いてもらうよう要請しているが、日常のプログラムの中に組み込むのはなかなか難しいようで、個々の園児が要請すれば、絵本の視聴は可能なようであるが、毎日の定期的な視聴は実際には難しい。英語に限らず語学の習得には、なるべく多く、当該言語に触れる時間を持つことが不可欠で、触れる時間が多ければ多いほど、習得できる可能性が高くなるといっても過言ではない(もちろんそれだけではないが)。今回は園児の一部にしか家庭用の教材を配布しておらず、家庭に教材のない園児については、園で視聴する以外に教材に触れる機会がない。このプロジェクトのもうひとつの目的である、「仲間と経験を共有することにより、連帯感を高め、いじめなどをなくす」ということに関しては、園での活動が重要になる。

歌については、著作権問題があり、今回はCDを配布することが出来なかった。歌を使うことは、音の習得をふくめ、言語の習得には大変有効であるので、今後は歌についてもCDを配布できるような措置が取れることが望ましい。

絵本については、集団を対象に読み聞かせるため、大きくて分かりやすいもの、文字の少ないもの、というのが前提条件になるが、なかなか適切な教材が見つからない。また、毎回英語で表現するテーマも決めるため、毎回異なったテーマに沿った絵本を探すことは容易ではない。オリジナル教材の作成も含め、このプロジェクトの最大の課題といえよう。

3 千代田区立お茶の水小学校における  
実践報告と大妻女子大学の  
授業との連携



### 3. お茶の水小学校における実践報告と大妻女子大学の授業との連携

#### 3.1 はじめに

本プロジェクトの実行は、前年度（2006 年度）より御茶ノ水幼稚園で行われたプログラムを体験した園児が小学校に入学して以降もそれを継続したいという要望があったことによる。前年度のプログラムが幼稚園、保護者の方々からのご協力の下、子どもたちに好意的に受け容れられたことは大変喜ばしく、また今年度は小学校でも行われることになり、追跡調査が叶ったことも、ありがたいことであった。

幼稚園と同様、保護者に「千代田学」の主旨を説明し、プロジェクトに協力していただける家庭、すなわち毎月の英語教材を小学校でやるのと同じように家庭でも子どもと一緒に絵本を読んでもらうだけの家庭を募集して 2 クラス（各 28 名）の中から 16 名の協力を得ることができた。

また、筆者は 2006 年度後期より大妻女子大学で「児童英語ワークショップ」の演習を受け持っている（2006 年度 45 名、2007 年度 30 数名）が、実際に受講した学生の中から、数名が御茶ノ水小学校の課外活動としての英語の時間に携った。学生たちは授業の中で学んださまざまな教授法、アクティビティを試し、その経験を通じて、机上の理論をいかに現実の活動に生かすかという問題と向き合うことになった。

筆者は、小学校ではプロジェクトの研究・指導員として、大学では教員として小学 1 年生と短大 2 年生の双方にかかわる経験を得たが、小学生の活気ある授業中の反応やエピソードを話すも短大の授業も活性化され、短大生の教案にあったアイデアを小学校でも実際に取り入れてみるなど、連携の可能性を模索した。以下に活動の詳細を記す。

#### 3.2 小学校での実践の様子

本プロジェクトの目的は、以下の 2 つである。

- 1) 英語に親しむ——早期教育が目的ではなく、外国語を通しての「異文化意識」にめざめさせる。
- 2) 社会性の発達をはぐくむ——教諭、友だち、家庭での人間関係の絆、連帯感を深め強化する。

幼稚園と同じく実施時間は 30 分であったが、小学生にはできれば「言語目標」（取り上げる英語の表現）をやや強化するような姿勢が望まれた。内容は以下の通りである。

- ① 挨拶の表現、Where is ～? / In the bag/ On the table/ Behind the chair 等  
前置詞を使った表現。
- ② 数の数え方の表現（1 から 10 まで）、動物の名前 mouse, squirrel, horse, duck, pig, rabbit,

goose 等

- ③ 反対語の表現 big/small fast/slow tall/short hot/cold happy/sad 等、動物の大きさや特徴を覚える
- ④ 曜日の表現 Sunday Monday～、食べ物の名前 runner beans, spaghetti, fresh fish, beef, ice cream 等
- ⑤ 時間の表現 what's the time? It's 10 o'clock 等、生活にかかわる日常表現 stretch my arms/ open my eyes/ brush my teeth/ read my book 等
- ⑥ 季節の表現 spring, summer, fall, winter、I like~/を使った表現 pick flowers/ lie in the sun/ watch the frogs 等

教材（別記）は幼稚園と同じ絵本、CD を使い、挨拶や歌なども同じように、同じものを使った。また、教室の準備として、指導員が行く前に、教室の机を後ろに下げて、いすを半円形になるように並べて座っていらった。

1

小学校の場合、1年生の教室に始めて入室した5月（第1回）は、児童本人が学校生活に慣れていないこともあり、28人で小さな1冊の絵本を中心として座って静かに耳を傾ける、ということ自体にやや困難が見られた。しかし、例えば身を乗り出したり、前に進み出てきて本のページの後ろを確認しようとしたり、といった反応はこちらのデモンストレーションに対するストレートな表現であり、関心の高さに逆に励まされた。挨拶の表現、歌など声に出しての活動に関しても、屈託なく表現できる児童と、羞恥心が先行してなかなか言えない児童とがおり、それぞれに応じての対処が必要であった。そのような時、幼稚園でも使用したぬいぐるみのクマが大いに役立ち、それを触らせながら安心して言える/話しかけるようにして言える環境を作った。目を閉じさせて、数秒数え、Peek-a-boo!とやると、クマが、まるで絵本の中から飛び出してきたかのように、子どもたちの教室の、オルガンの上に座っていたり、先生の机の下にいたり、そのような具体的で3次元的な見せ方をすると子供達は大いに喜んで、言葉を口にしていた。

2

第2回の数の表現に関しては、幼稚園でもかなりの子どもたちが1から10までを理解している様子であったので、小学校でも期待が持てた。予想通り、10以上も数えられることを誇らしげに表す児童もいたが、そのような児童には「よく知っているね」と声をかけた上で、絵本を読み終わったあとに今日出席している人がクラスに何人いるかを、実際に席を立てて数えあってみた。28人を10、10、7、と数え、「足し算するといくつか分かる？今日は一人お休みなのね」などと声をかけると、どの児童もととても満足そうだった。

3

第3回では第2回での数、動物の表現の復習、反対語とかなり盛りだくさんであったが、夏休みを前にクラスの雰囲気も落ち着いてきて英語絵本の時間が定着してきたことを窺わせる様子だった。エピソードを一つ紹介すると、上記のような反対語表現のほかにも、この

絵本には **whisper/ shout** を示す場面でおサルが内緒話をしていて、1匹のねずみが怒って叫び、もう一匹が耳をふさいでいる絵が描かれている。この絵本を子どもたちに読んだとき、筆者は「みんな自分でも真似してやっごらん」と指示し、子どもたちは泣く/笑うまねをしたり、汗を拭く/ぶるぶる震えるまねをしたりとても上手にやっていた。**whisper** のところでも、お隣の人にやっごらん、と指示したのが、みんな面白くなってついついどんだん声が大きくなった。そのとき担任の先生が一喝！「みんな、静かにしなさいー」子どもたちは一瞬びっくりしたような表情になったが、すかさず筆者は「ね、これが **shout**、ってことよ。先生は **timely** にいいことをおっしゃってくださったわねー」とみんなで大笑いした。このように、絵本の中のことばを実際にクラス全員で体感する機会があったことは、とても良かったことの一つである。

4

第4回では曜日、食べ物の個別の名前を覚えることとともに、絵の中の動物、色、数などを復習することにも力を入れた。**How many ~? What color ~?** 等とくにターゲットに入れていなかった事柄を混ぜても、子どもたちは **five** とか **green** などと返答してくれるので絵本をさまざまに使うことができた。

5

第5回の時間、日常動作の表現は、その教材の楽しさもあって大変盛り上がった。1年生は算数の勉強で実際に時計の勉強もしており、時刻が分かるということ誇らしく思っている様子だった為、それを更に英語で応答できるようになるということで、どの児童も目を輝かせた。また先述したように、教材がポップアップで、ワニの目が開いたり閉じたり、腕を伸ばしたり縮めたり、歯を磨く、本を読む、最後はご飯を大きな口をあけて食べる、が生き生きと描かれている。表現は1年生には多少単純なものばかりかとも思われたが、**knock, knock** と絵本の扉を順番に子どもたちにたたかせてやると大いに楽しんでた。

6

第6回は四季を追ったストーリー性のあるもので、それぞれの季節に合わせてウサギの子が、**pick flowers, chase the butterflies, lie in the sun** などをして過ごし、冬が来て冬眠し、また春を待ち望む、というとても **poetic** な内容である。教材が変形であったこと、短大生からのアイデア（これは後述する）もあり、この教材は紙芝居仕立てにして、28名の児童がゆったりと見えるように配慮して、CDを聞かせた。先述したとおり、詩的でやや大人っぽいクラシカルなイメージを持つ絵本であったが、児童の中には、この絵本の文字通り「美しさ」に惹かれて大好き、という感想を持ったものが少なからずおり、色が明確で単純化された、いかにも子ども向け、という教材ばかりでなく、繊細で雰囲気のある絵本が十分に教材になりうるということが分かり、児童の美的な感受性に感嘆し、大変興味深かった。季節が循環することをよく知っている児童は、それとともに12月が1年の終わりで、再び新しい年が1月から始まることとあわせ、理解を深めていたようだ。筆者は、「みんなが1年生になったのはいつだった?」「夏休みっていつ?」「今度 **spring** が来たらみんなは何年生?」

などと声をかけ1年生の間に経験した行事などと結び付けて理解させようと試みた。

### 3.3 大妻女子大学での授業との連携

はじめにも述べたように、筆者は大妻女子大学で短大2年生に「児童英語ワークショップ」という演習を行っている。ここでの教材としては、主に Mary Slattery & Jane Willis 著、*English for Primary Teachers* OxfordUP の日本語版、『指導者の養成・自習のために子ども英語指導ハンドブック』（旺文社、2003年）を用い、アルク児童英語教師養成コースの教材の中から、発音・文法に関して反復練習を行い毎月ミニテストを課した。子どもに英語を教えてみたい、という学生は多いが、それは子どもの英語なら簡単そうだから、楽しそうだから、という理由が圧倒的である。自分も昔やっていたから、という学生もいれば、自分の子どもに教えてあげたい、という学生もいる。しかしその前に、と筆者はそのような学生たちに強調したかったのは、子どもに英語を教えることには考えている以上の大きな責任と覚悟が必要であるということである。学生たちにとっては発音や文法は今更という内容のことであったかもしれないが、毎月のミニテストの成績によっては、自分の英語の厳しい現実に向き合わざるを得ない者もいた。

また成績はよくても、子どもに教えるのに必要な、明るさや楽しさといった、雰囲気をもう少し工夫した方がよいと思われる学生もいた。上記のテキストを学び、一通りの教授法、アクティビティを紹介し、実際の英語教室の活動ビデオなどを見た後、それぞれに教案を作成させ、グループまたは個人で先生と生徒役になりきりあって、発表・講評しあい、それをさらに改善して提出する、というのが授業でのゴールであった。自分の英語を磨くこととともに、学生に強調したところは、子どもたちに教えるときに決して強制しようとしないこと。今一緒に声を出したり、体を動かしたりができなくても、他の友達がやっているのをじっと見て、やがてできるようになる時が来る。家族で本を読むうちに、その気持ちよさに気がついていつのまにか自分でもやりたくなる時が来る、それを待つことも大切だから、実際に教えに行った時、子どもたちが自分の思ったようにやらないからといって、焦ったり、落ち込んだりしないで気長にやること、この様な声かけをした。グループワークの中では、紙芝居（ぐりとぐら、シンデレラ、クリスマスにちなんだ話）やすごろくゲーム、間違い探しゲームなどを取り入れて、教案を作り実演した学生もいて、これはやっている本人たちもさることながら、見ている生徒役の学生たちのも大変好評だった。そこで筆者も小学校で、小さな絵本を紙芝居仕立てにすることを試み、黒板にその場面をはりつけ児童と眺めながら英語表現の確認をすることができた。

実際に小学校に英語活動をしに出向いた学生の中には、児童の想像以上のさまざまな反応に、衝撃を受けていた者もいたが、自分たちも経験したグループワークやチーム対抗のゲームなどを取り入れると児童が生き生きと活動すること、どんな発言や行動でも見つけてどんどん英語でほめてあげると喜ぶこと、積極的な子どもには発言させてやるとクラスが停滞しない、集中力を高められるような活動をもっと工夫したいなど、発見や反省が見

られた。また自分の英語力に関しては、やはり反省すべき点が多かったようで、これを機に再度奮起を促したい。

### 3.4 アンケート

小学校でのアンケートの結果は以下のようである。

#### (1) 保護者アンケート

7月と12月に行った保護者アンケートの結果は以下のようである。

##### 1) プロジェクトに参加した動機

「子育ての中に積極的に英語を取り入れていきたいから」「子どもに英語を話せるようになってもらいたいから」という回答が同率で3分の2という高い動機であった。「去年にこのプロジェクトで、毎月教材を受け取っていたから」が次点、「児童文学や子どもの絵本に関心があるから」が、3分の1あった。幼稚園同様、文化的な要求より英語習得の足がかりとしての期待がより大きいことが分かる。

##### 2) 家庭での利用回数

平均的な教材の利用回数は、7月の調査では「週3回以上」という回答が半数以上であったが、12月には「週1回から2回」という回答が8割近くを占めた。「ほとんど使っていない」という回答はないが、「週3回以上」の回答も1割となった。

##### 3) 子どもの変化

幼稚園同様、このプロジェクトを通して子どもが変化したことなどについては評価する回答が多かった。自分のよく知る日本語を英語ではどう言うのか、知りたいなど「英単語への興味」が出てきたり、外国人を見ると、「この人英語を話す人？」と自分から積極的に話しかけようとする素振りが見えたり、「異文化の理解」について深まった様子が窺える。また、英語だから、日本語だからという枠にとらわれずに、子どもが自然に両方を受け入れている姿勢も、保護者には好意的に感じられていることがわかった。

#### (2) 児童アンケート

##### 1) 好きな教材

*Knock, Knock, Mr Croc* に代表される仕掛け絵本、*I'm a Bunny* のような絵のきれいなもの、*Today's Monday* のような有名な作家による絵本などが人気が高かった。

##### 2) 言語目標の達成度

挨拶、色、数、などを面接して尋ねたところ、挨拶、数に関しては全体、色は4分の3が、歌は6割以上が自分でも自信を持ち、尋ねたことにきちんと答えられていた。ゆえに、全員がそろって「これからも続けたい」と回答した。

### 3.5 まとめ

小学校での指導全般については、おおむね当初の目的を達成した。但し、幼稚園同様、実施の方法、教材の選定等についての課題が残されている。小学校では各クラスに絵本とCDを一組として置かせていただき、適当な時間を作って、定期的に全員に聞いてもらえるよう準備をしたが、やはり学校生活という日常の中で、継続的に行うことは難しかったようだ。保護者のアンケートにもあったが、小学校に入学すると、時間割どおりの生活、学習、宿題、家庭学習など忙しく、特に夏休み前の1学期は学校生活そのものになれることに精一杯で、とてもプロジェクトにまで手の回る状況になかった様子が伺える。それでも、本プロジェクトと直結していたわけではないものの、土曜日に小学校で行われていた課外活動には英語が含まれており、1年生から6年生までの児童が参加している様子から察するに、どのような形であれ、英語活動が児童にとって楽しいこととして認識され、自分から是非やってみたい、もっと知りたい、言ってみたいという要求の高い活動であることがわかる。児童の知的好奇心を満たし、また刺激し続けるためにも、幼稚園の報告にもあった様に、歌の著作権問題によるCDの使用や絵本の選定の困難をクリアすることが課題となるだろう。他に、ひらがなを学び始めた児童からの、絵本の中のアルファベットを、書いてみたいという欲求もたびたび感じられた。しかし本プロジェクトにおいてはそこまでのフォローはできず、せつかくの文字そのものへの好奇心を具体化できなかったことも反省点であった。限られた時間の中でもCDを繰り返し聞くことにより、英語の自然なリズム、発音をまねして学ぶ、ということに集中できたこと、絵本の細かな描写に対する観察力が養われたことは喜ぶべき点である。

児童を含め、子どもに英語を教えたいと望む学生は今後も増えることが予想されるが、小学校では平成22年の英語導入の本格化に備え、ますます現場の様子に柔軟に対応できるような英語力、指導力にあふれた人材が求められよう。このプロジェクトそのものに今後学生がかかわる可能性もあろうから、ぜひとも確かな人材を育てることに全力で取り組まねばならないと考える。

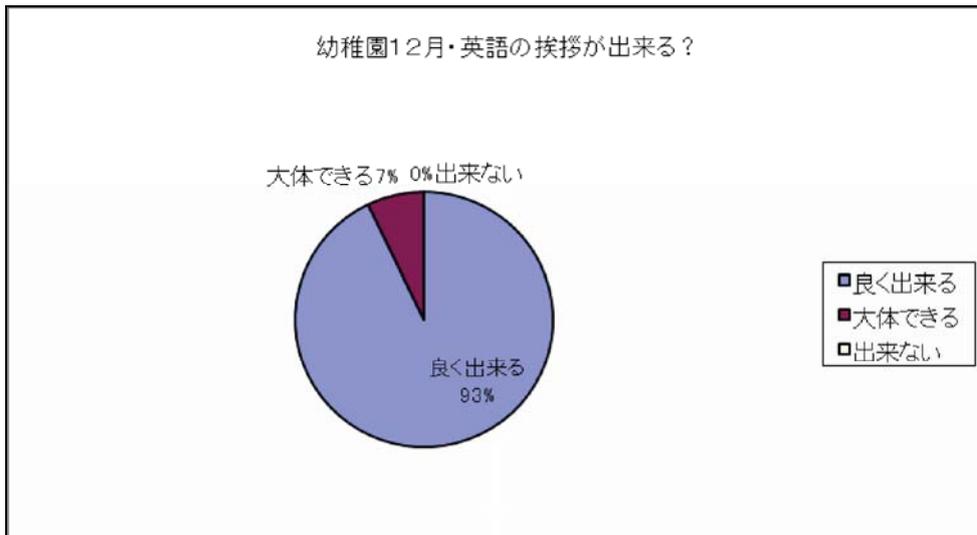
## 付録 1

# 園児・児童のアセスメント結果及び、 保護者アンケートの結果

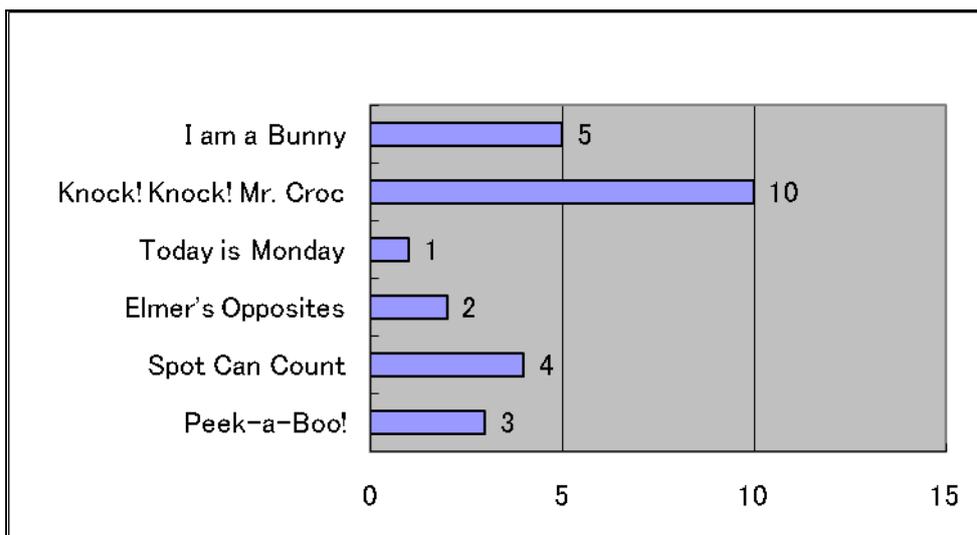


## 1 幼稚園児のアセスメント結果(個人面談による)

### 1. 英語の挨拶が出来るか



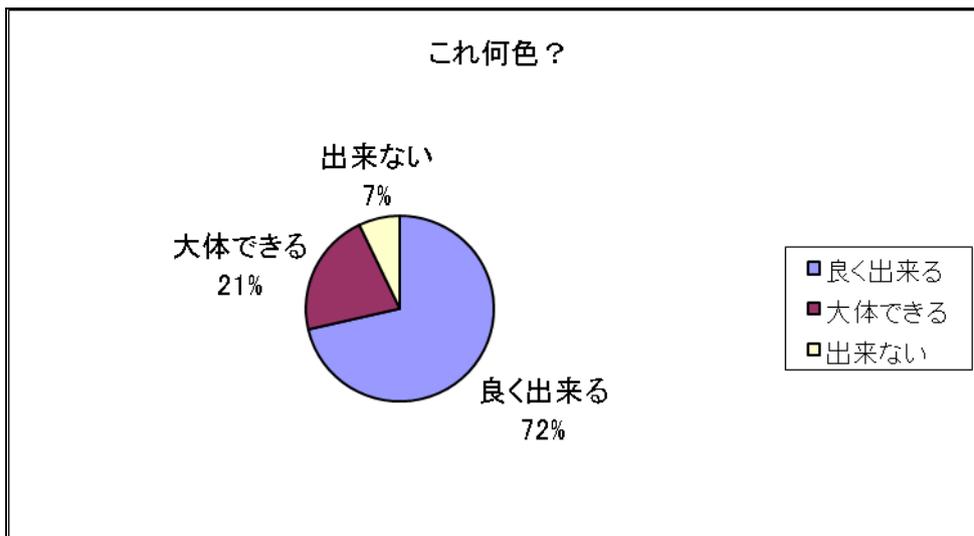
### 2. 好きな絵本



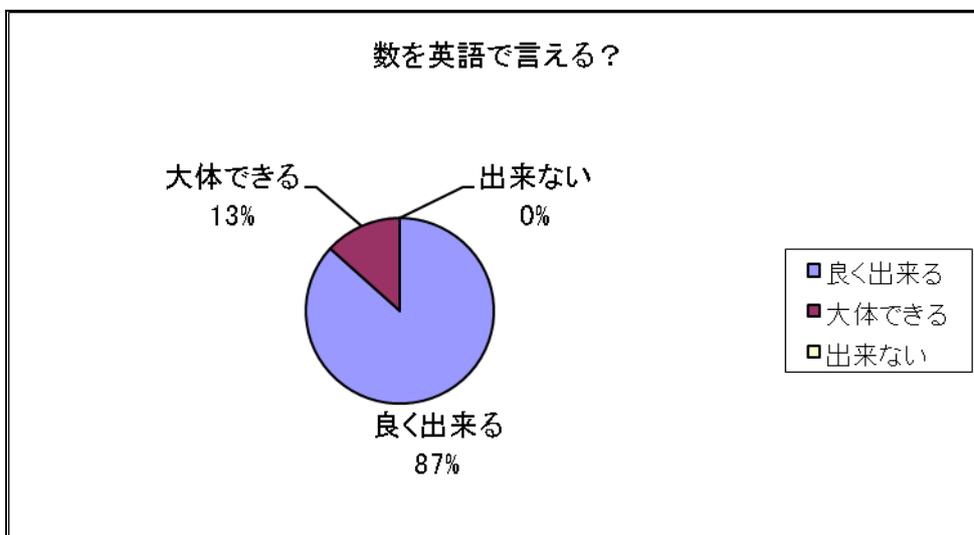
理由

b	鳥のところが好き/Spot が好きだったから
e	動くところ/ベッドで起きるところが好き/最後のページ/ご飯を食べるところ
f	毒キノコ

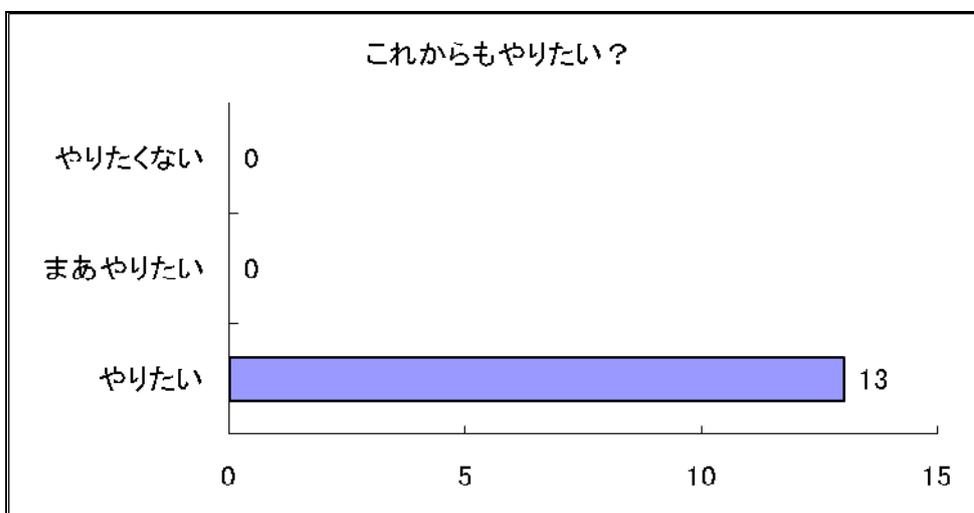
色の名前を英語で言えるか



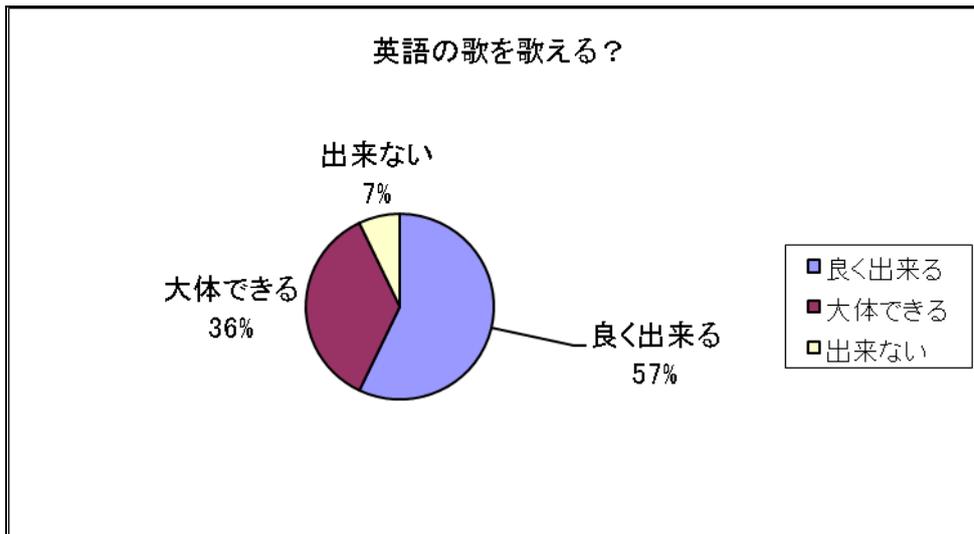
4. 数を英語で言えるか



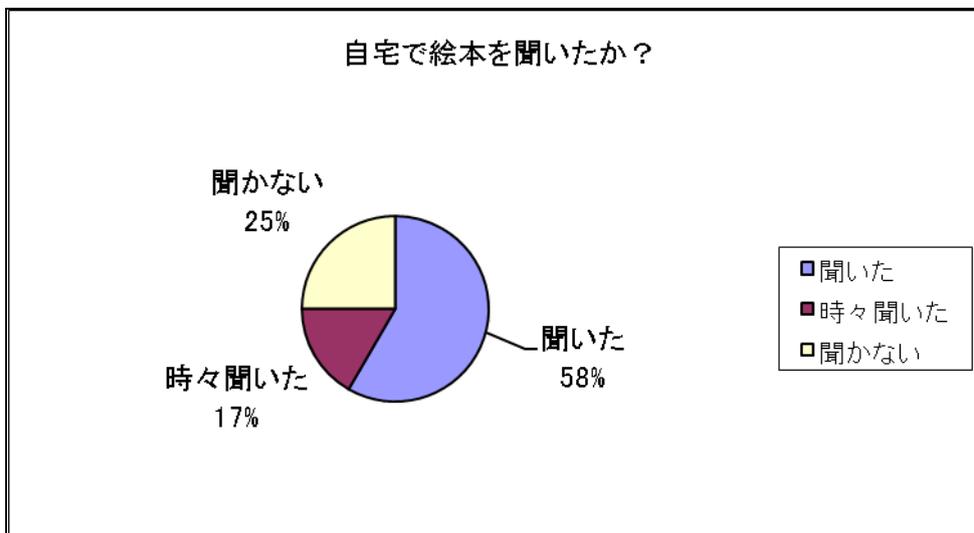
5. これからもやりたいか



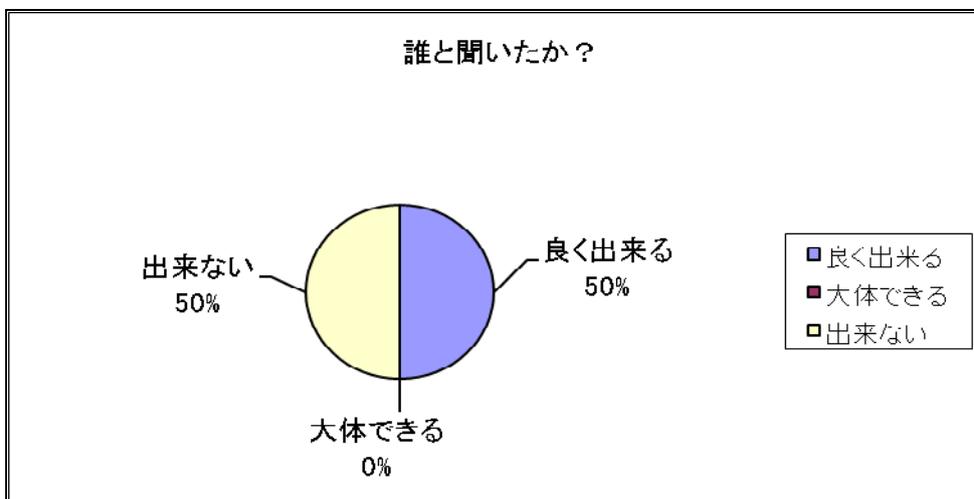
## 6. 英語の歌を歌えるか



## 7. 自宅で絵本を聞いたか



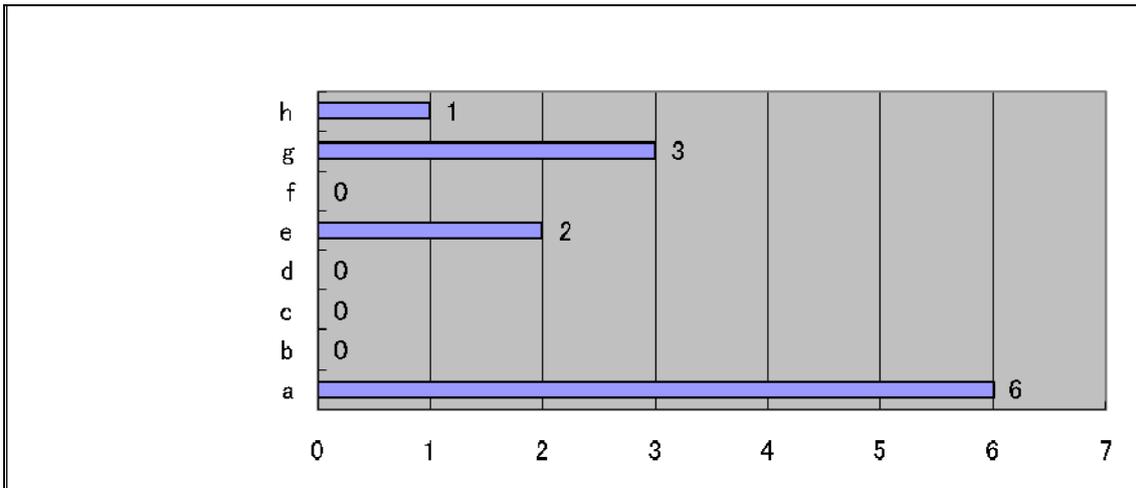
## 8. 誰と聞いたか



誰と？一人/母/妹と/NOVAの先生・友人一人と自宅にて

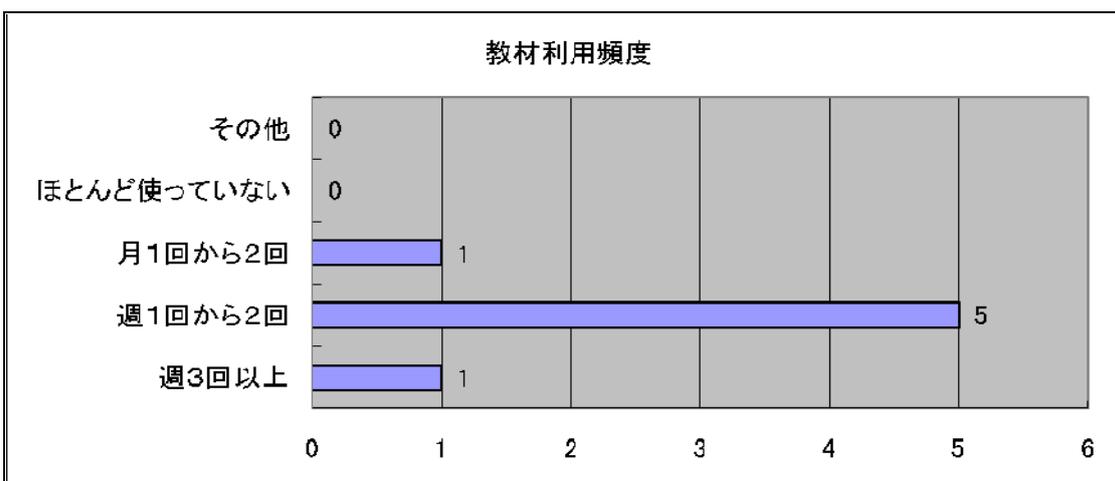
## 2 園児保護者アンケート結果(一回目)

このプロジェクトに参加していただいた動機は、どれですか。

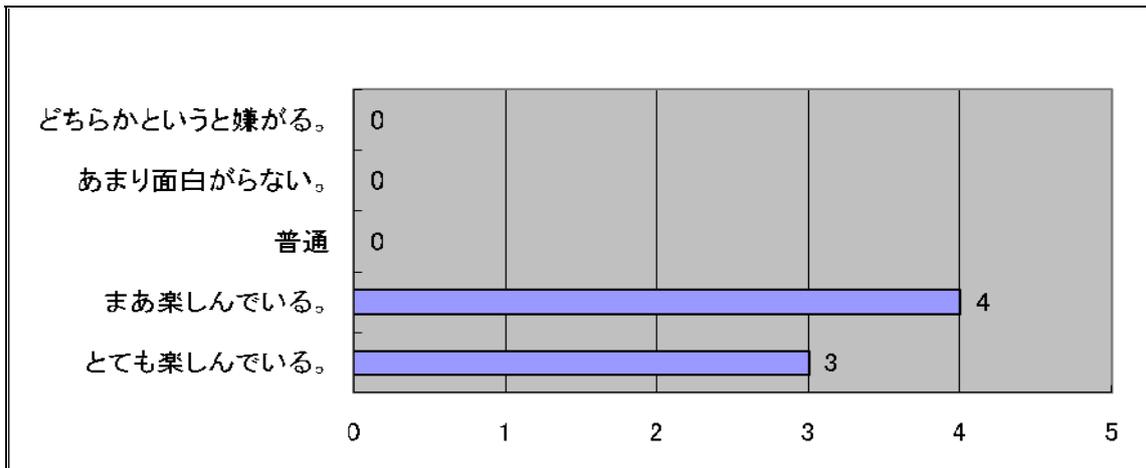


a	自分の子育ての中かに、積極的に英語を取り入れて行きたいから。	6
b	幼児英語教室に子供を通わせたいと思っていたから。	0
c	児童文学や子供の絵本に関心があるから。	0
d	英米文化に関心があるから。	0
e	子供に英語を話せるようになってもらいたいから。	2
f	お茶の水幼稚園の卒園生だから。	0
g	去年もこのプロジェクトで、毎月教材を受け取っていたから。	3
h	その他	1

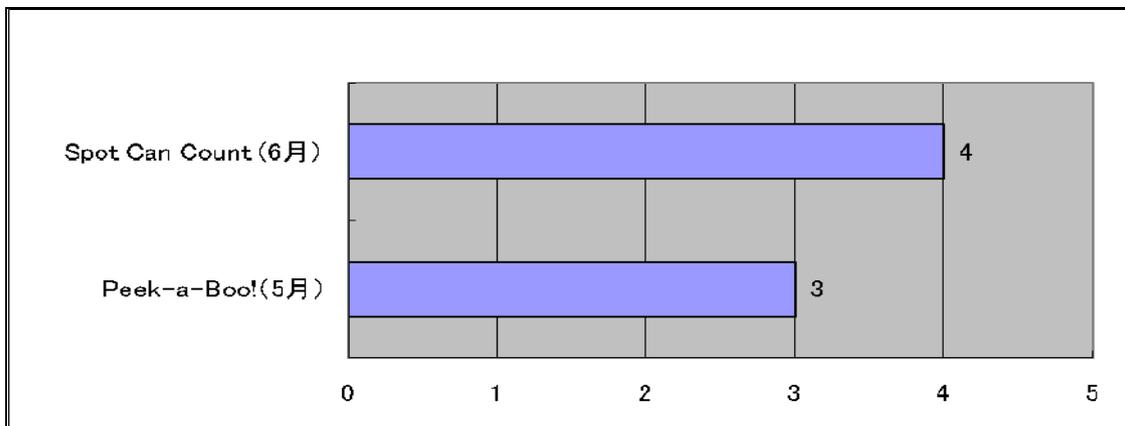
現在ご家庭では、平均どのくらいのペースで、教材をご利用いただいていますか。



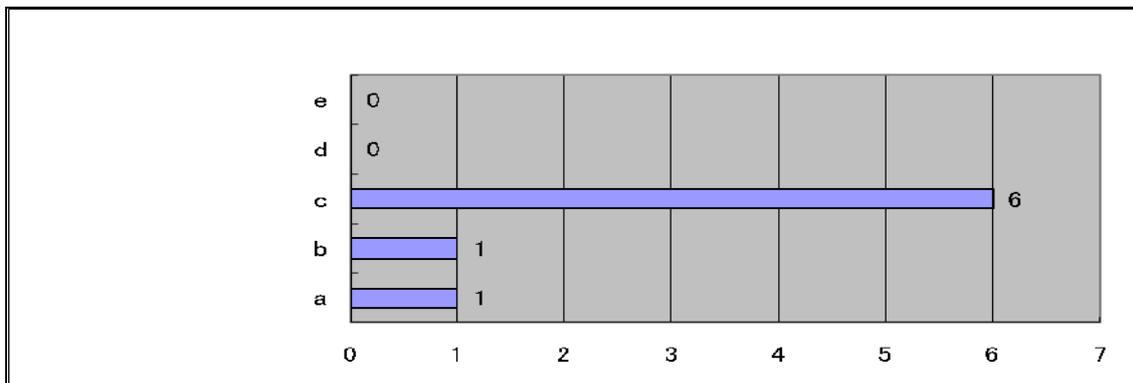
お子様の反応はいかがですか。



お子様は、どの絵本が一番好きですか。

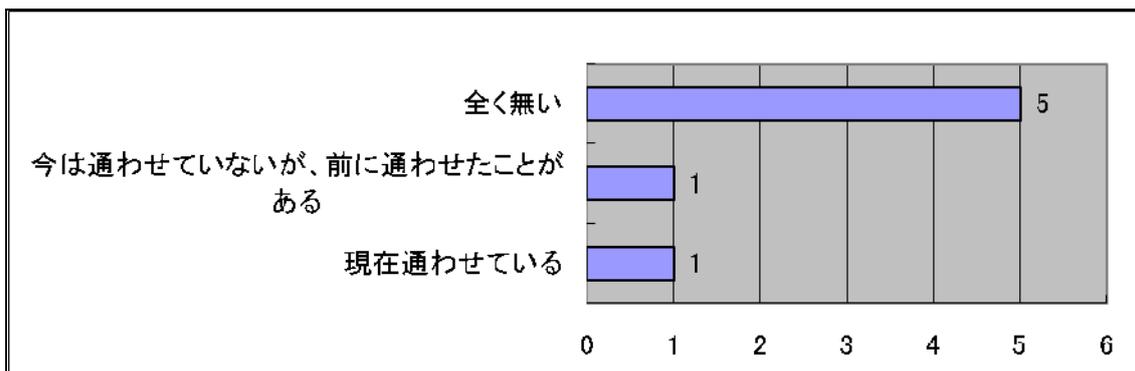


ご家庭で絵本を読む時は、どのようにしていらっしゃいますか。

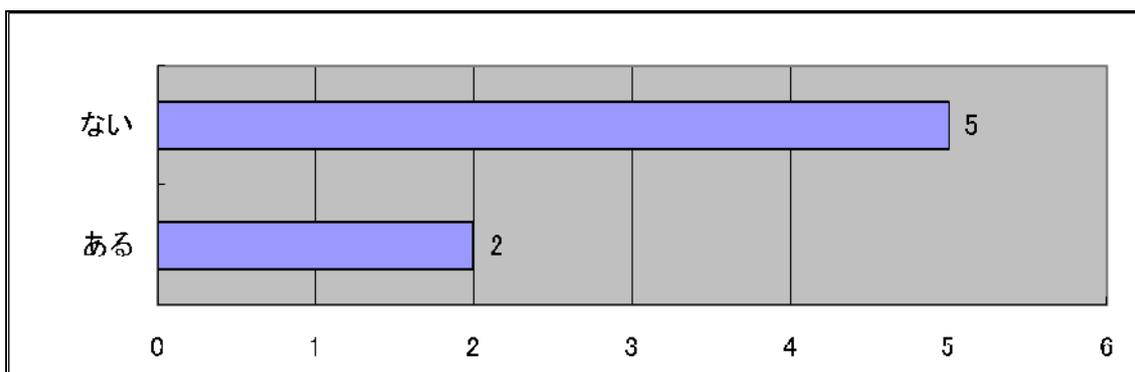


a	子供が自分で CD をかけて本を見る	1
b	保護者と子供と一緒に黙って CD を聞きながら本を見る	1
c	保護者と子供が絵本について話したり真似したりしながら CD を聞く	6
d	保護者が子供に英語で本を読む	0
e	その他	0

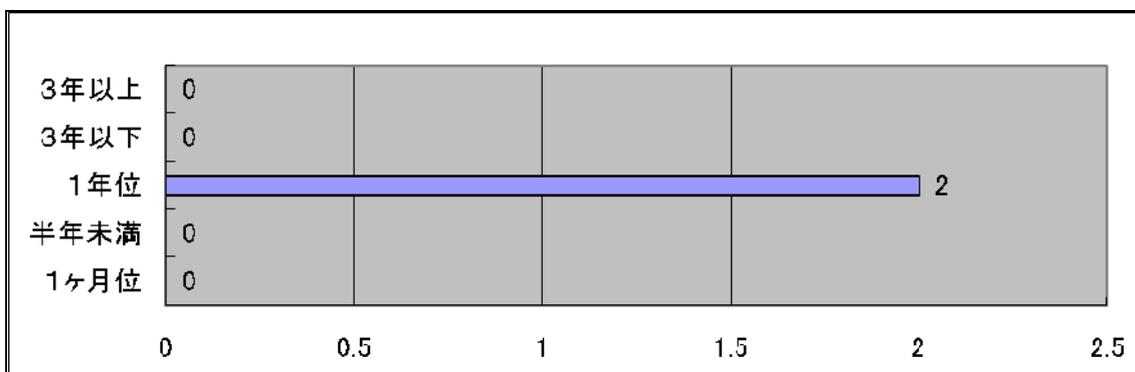
お子様を幼児英語教室に通わせたことがございますか。



保護者の中に、英語圏の国に長期滞在経験のある方がいらっしゃいますか。



ある と答えた方にお聞きします。期間をお教えてください。(複数回答可)

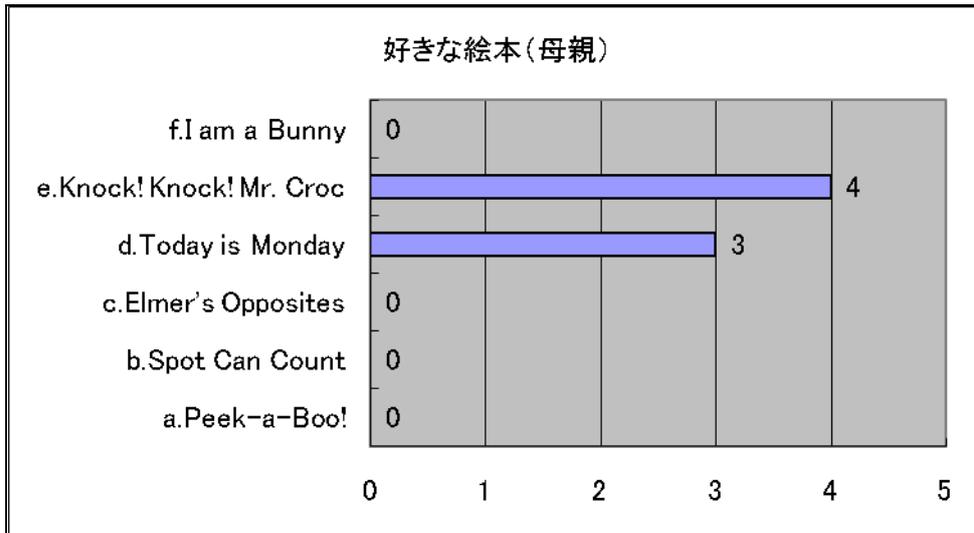


その他、ご意見やご感想、ご要望など何でも、ご自由にお書きください。

- ・ 毎回とても楽しんでいるようです。帰ってくると新しい挨拶を使ってみたりしています。テレビや道で外人の人を見ると、英語の人だと喜びます。本人は、アメリカに恐竜の発掘に行きたいとの夢があるようで「英語幼稚園で習ってるよね」「もうすぐ喋れるようになるよね」と言ったりしています。
- ・ 絵本を読んでいて親自身が単語の意味がわからないことがあったりするので虎の巻(日本語の解説)というか日本語訳をメモで良いのでつけてくれるとありがたいです。

### 3 園児保護者アンケート結果(二回目)

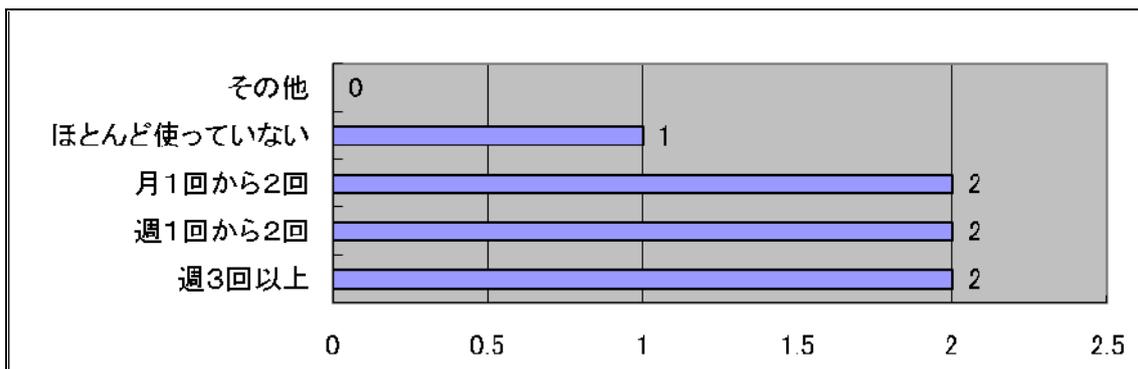
全ての教材の中で、お母様が一番気に入られたものはどれですか。



理由

d	CDを聞きながら一緒に歌ったりして楽しかった
	本人がよく歌っていたから。リズムがいいから。
	自分では選ばない一冊かな、と思ったところ、絵が大胆でなんとなく楽しかった。音楽も楽しかった。
e	しかけ絵本で、子供がとても気に入って読んでいたため
	仕掛け絵本で楽しい。
	ストーリー性があり、良かった。
	仕掛け絵本に子供が大変興味を持ってみておりました。

自宅ではどのくらいのペースで教材を使用されましたか？



この英語活動プログラムを通して、何かお子様に変化等がございましたか。

(絵本やCDについて、幼稚園や小学校での英語活動について、また外国語や外国語の文化について、何かお家で話されたことで印象深かったことなど)

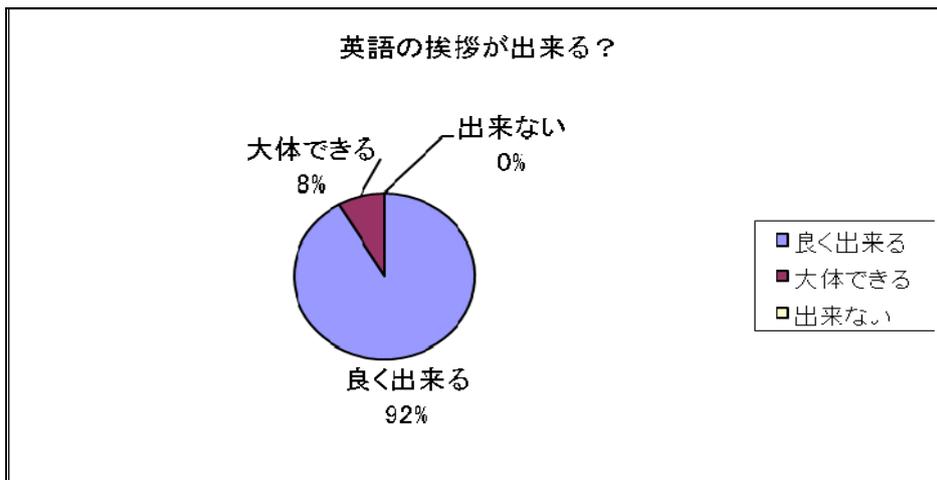
- ・ 英語の歌を唄ったりするようになりました。
- ・ 以前は外国の人という区切りで、しかも白人、黒人の見分け下出来なかったのに、このごろは世界には色々な言葉があり、アジアの中で同じ顔をしていても、別の国の人という意識がもてるようになりました。世界には色々な人たちがいるんだね、と話したのが印象深かったです。
- ・ 明確な変化やエピソードはありません。日常生活の中で、英単語が増えた印象も余り感じません。CD を聞くことの抵抗は少なくなり、平均的にどの本も見たり聞いたりしたように感じます。
- ・ 最近、DVD の日本語吹き替えを、英語で見たい、そして日本語で普段から使っている単語を発見して教えてくれます。英語で話す国にも大変興味を持っています。しかし、勉強や、「聞こうか」と教材を示しても、まだまだ反応が鈍いです。
- ・ 日本語で馴染みのあるものについては比較ができ楽しんでいました。音として楽しい“Peek-a-Boo!”などは、音から入り楽しんでいました。異国語の違いを楽しめるようになった。
- ・ 日常の中に多少の英語が出てきたこと。英語の歌を好んで唄うようになったこと。英語のビデオを嫌がらなくなったこと。
- ・ 自分でABCを書いてみたり、教えていただいた歌を口ずさんだりするようになりました。英語自体よりも、なんで言葉が違うのかとかどうして違う国なのかとかその背景に興味湧いたようです。

これからもこのような過程での英語活動を続けたいと思われますか。

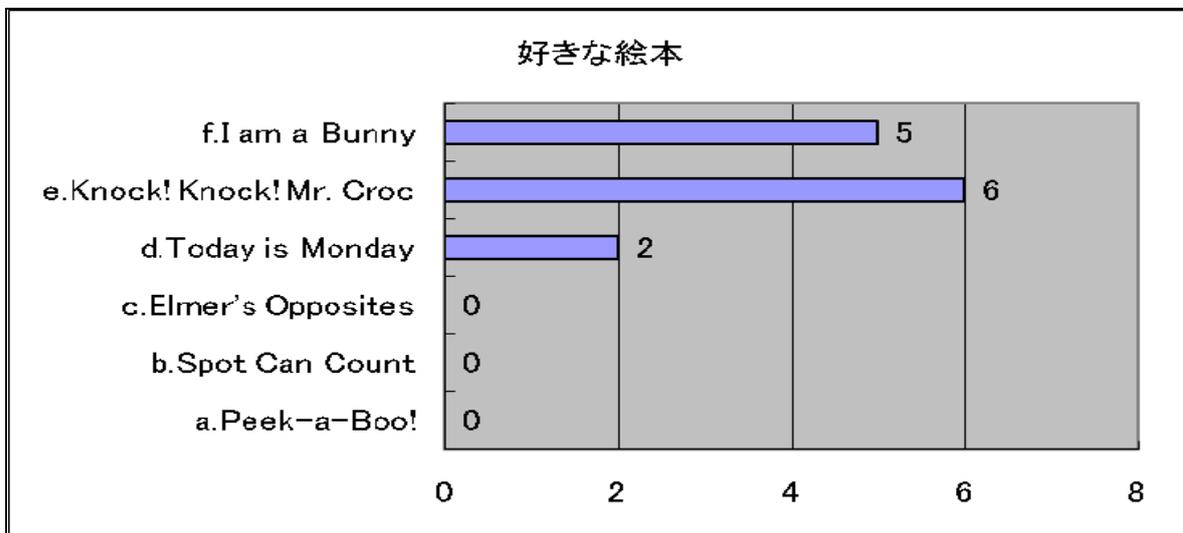
- ・ 続けたいと思います
- ・ 是非、続けたいと思います
- ・ 出来れば続けてみたい
- ・ 思います。親子共々楽しみながら出来てよいです。
- ・ 続けて行きたいです。
- ・ はい。英語のみにとらわれず、広い意味で自分達と違うものを持っている人がいるという事を、広い心で受け入れられるようになればと思います。

#### 4 小学生児童のアセスメント結果(個人面談による)

##### 1. 英語の挨拶が出来るか



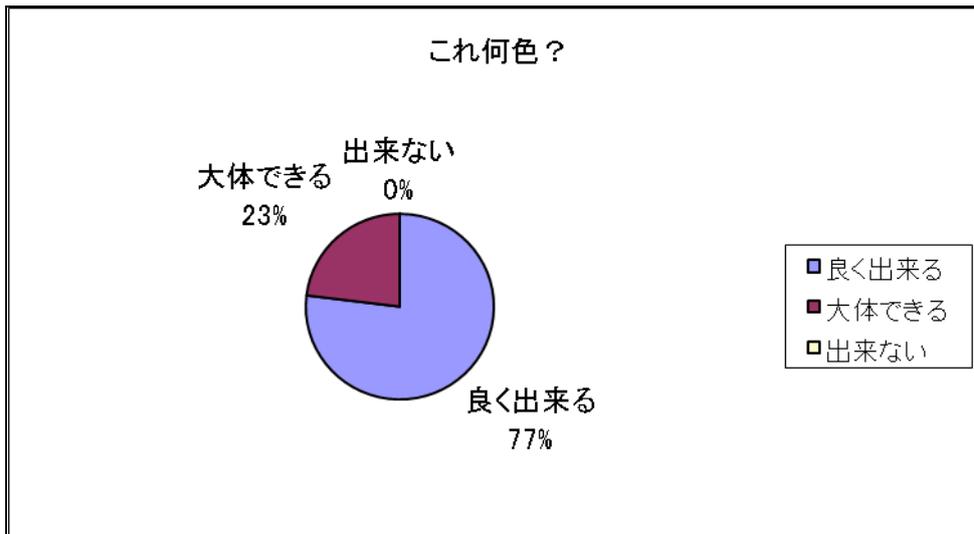
##### 2. 好きな絵本



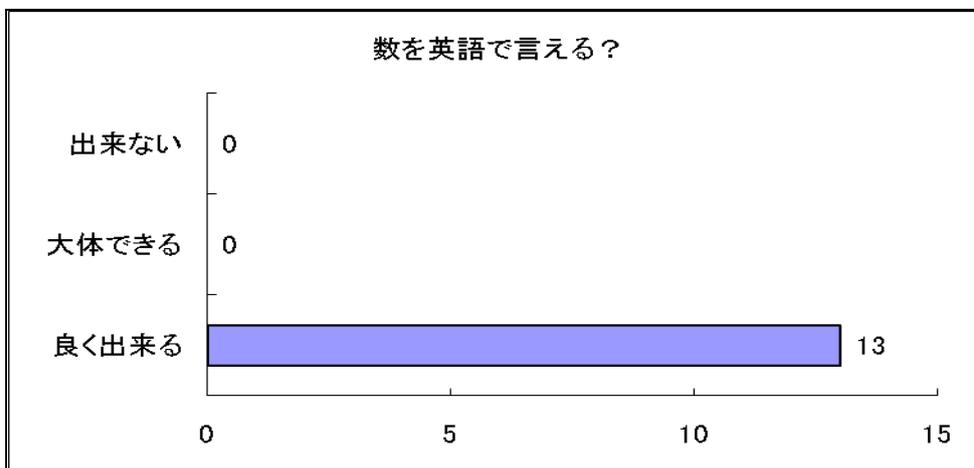
##### 理由

d	いろいろな動物/最終/曜日が面白い、歌
e	仕掛け/move 仕掛け/動きがある/矢印を動かすと動く、最後のページが好き
f	きれい。冬眠の絵が好き/flower、きれい、かわいい/seasons, beautiful/絵の可愛いところ/ 春夏秋冬

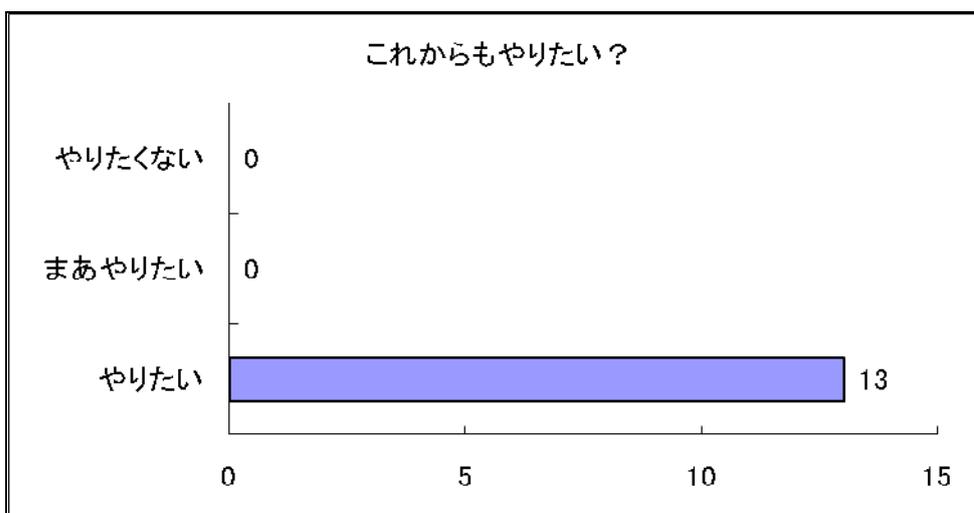
### 3. 色の名前を英語で言えるか



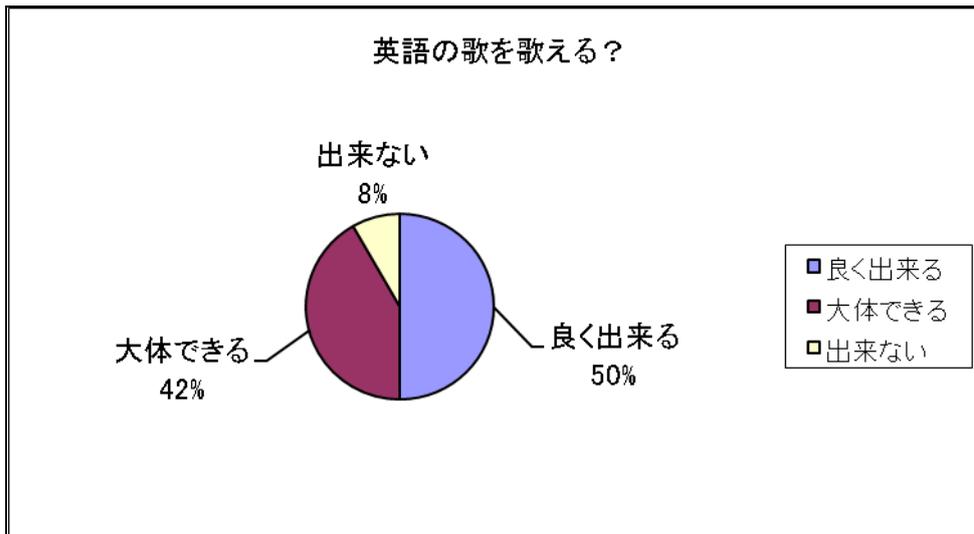
### 4. 数を英語で言えるか



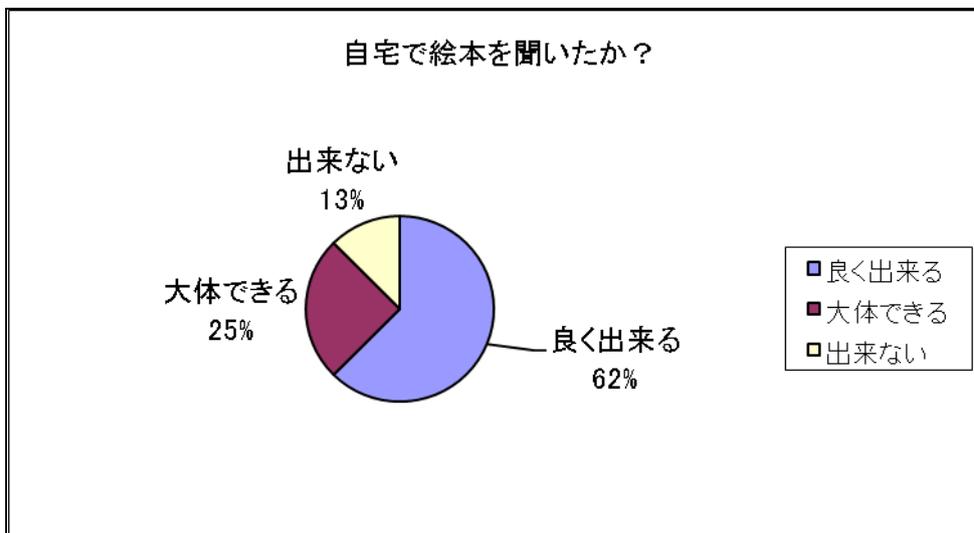
### 5. これからもやりたいか



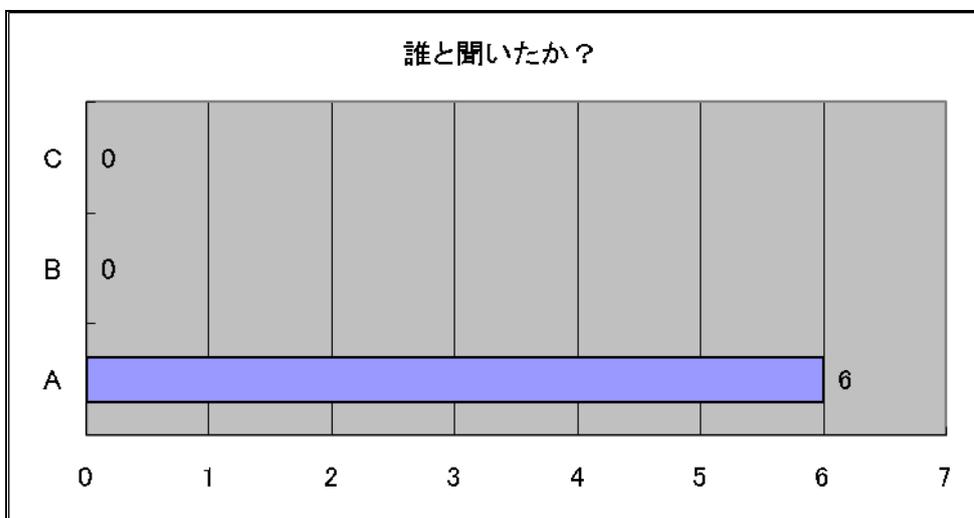
6. 英語の歌を歌えるか



7. 自宅で絵本を聞いたか



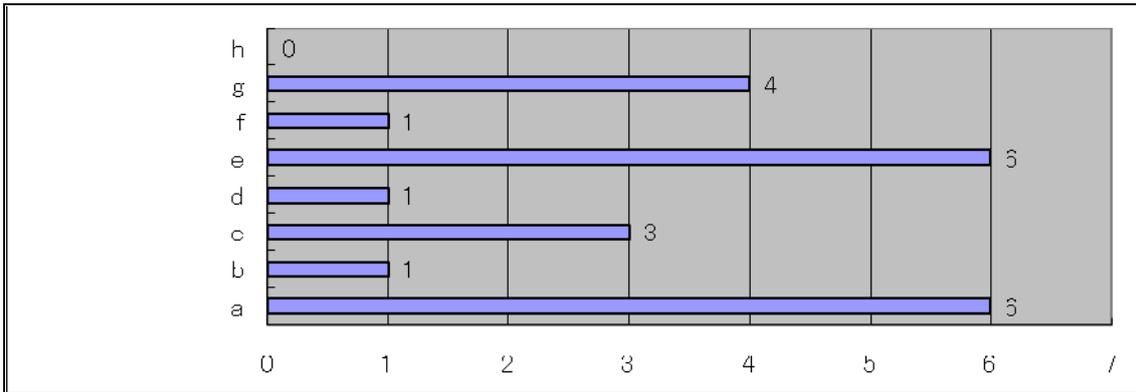
8. 誰と聞いたか



A: 母、自分、母と弟、母と妹

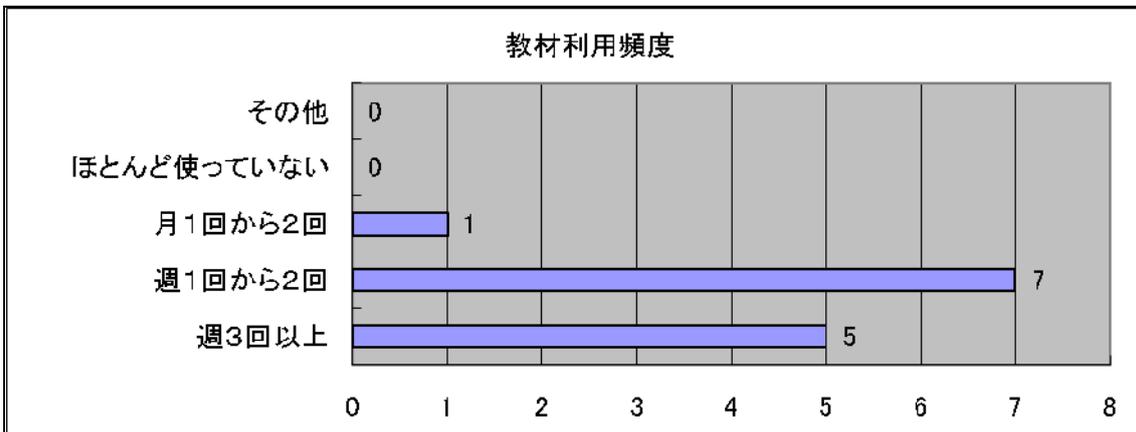
## 5 児童保護者アンケート結果(一回目)

このプロジェクトに参加していただいた動機は、どれですか。

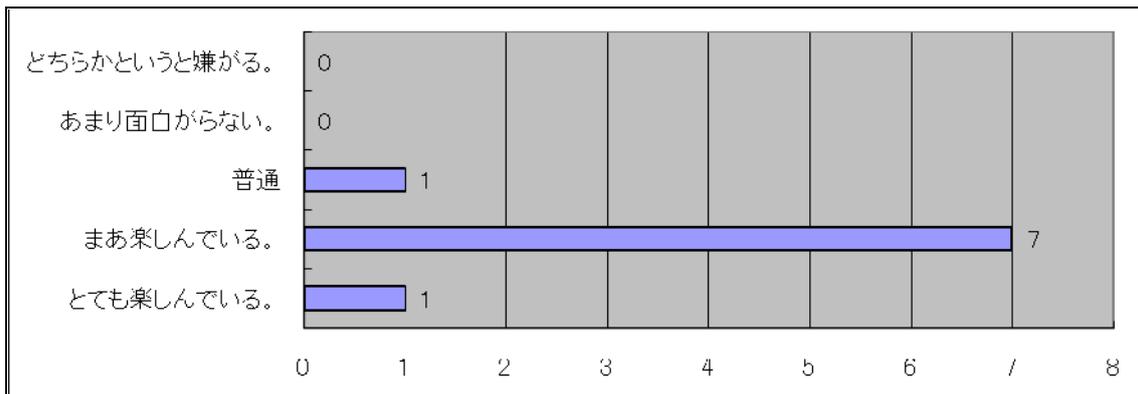


a	自分の子育ての中かに、積極的に英語を取り入れて行きたいから。	6
b	幼児英語教室に子供を通わせたいと思っていたから。	1
c	児童文学や子供の絵本に関心があるから。	3
d	英米文化に関心があるから。	1
e	子供に英語を話せるようになってもらいたいから。	6
f	お茶の水幼稚園の卒園生だから。	1
g	去年もこのプロジェクトで、毎月教材を受け取っていたから。	4
h	その他	0

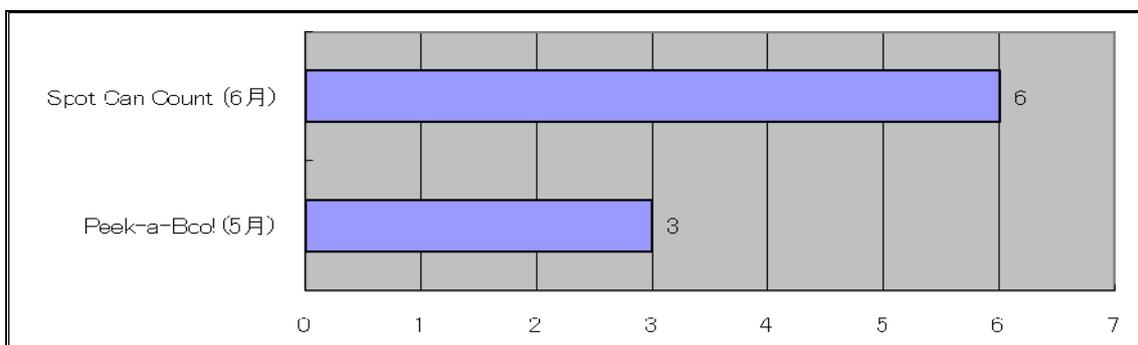
現在ご家庭では、平均どのくらいのペースで、教材をご利用いただいていますか。



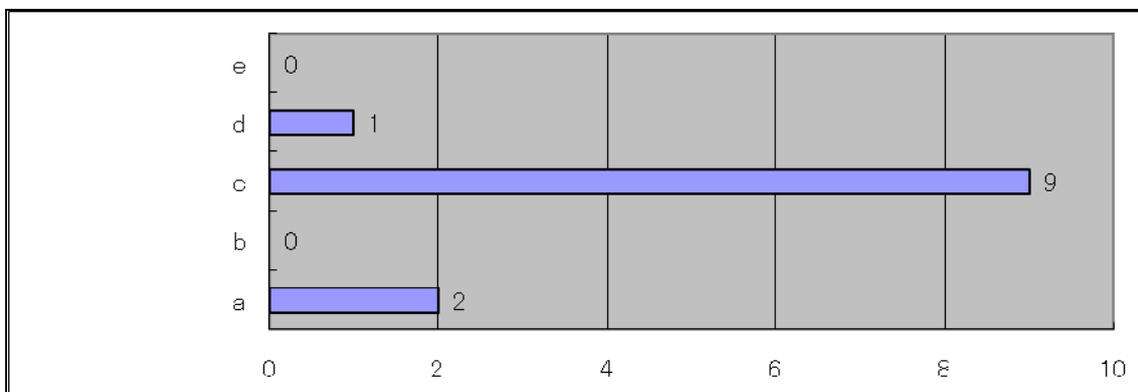
お子様の反応はいかがですか。



お子様は、どの絵本が一番好きですか。

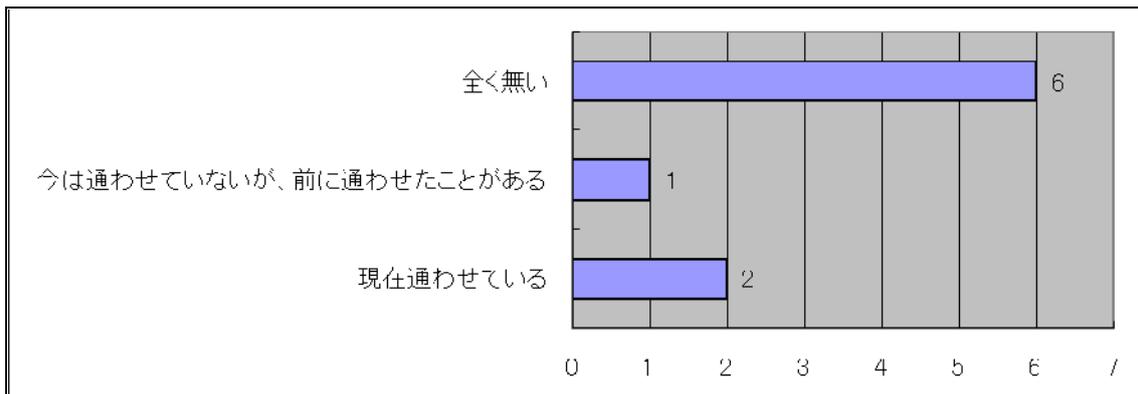


ご家庭で絵本を読む時は、どのようにしていらっしゃいますか。

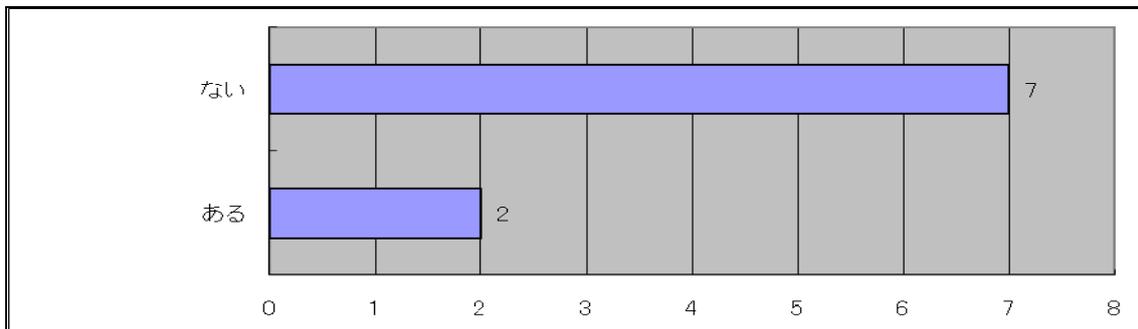


a	子供が自分で CD をかけて本を見る	2
b	保護者と子供と一緒に黙って CD を聞きながら本を見る	0
c	保護者と子供が絵本について話したり真似したりしながら CD を聞く	9
d	保護者が子供に英語で本を読む	1
e	その他	0

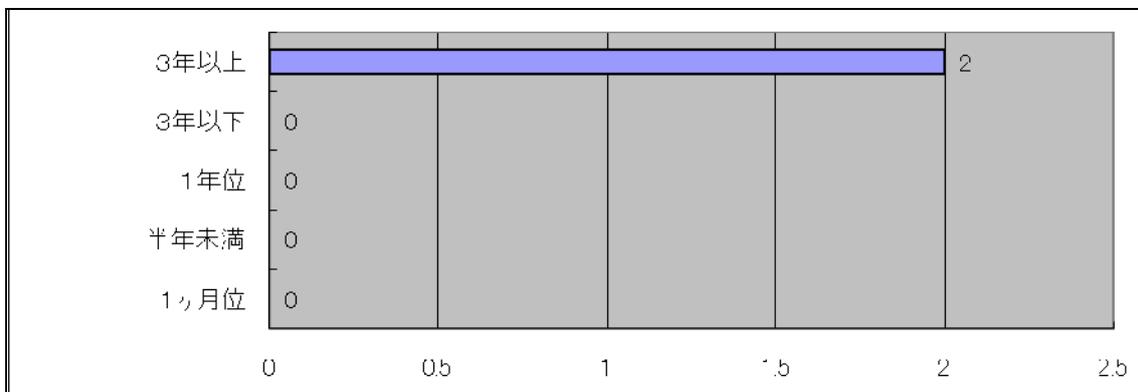
お子様を幼児英語教室に通わせたことがございますか。



保護者の中に、英語圏の国に長期滞在経験のある方がいらっしゃいますか。



ある と答えた方にお聞きします。期間をお教えてください。(複数回答可)

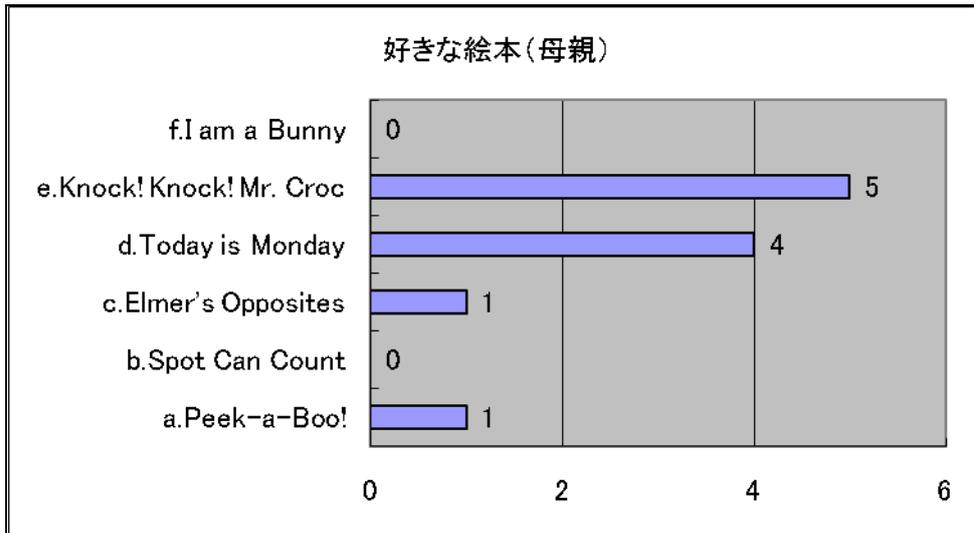


その他、ご意見やご感想、ご要望など何でも、ご自由にお書きください。

- ・ 短調に読み流すものよりも、作業っぽいものや効果音が多く入っていると遊び感覚で楽しめるようです。CDが少し聞きづらく、子供だけで使うのは少し無理のような気がしました。CDが流れると、楽しそうに言葉を真似ていたので、1日に何回も聞きました。
- ・ 和訳が子供も分かるような形であると良いのではないのでしょうか
- ・ 最初のうちは喜ぶが、飽きてしまう様子。子供だけではやろうとしないが私が教材を持ち出すと、膝の上に座って本を開くが、やりたい時とやりたくない時のムラがある。
- ・ 幼稚園のときより学校で行うことが殆ど無い様で、皆で行う楽しさが現在は無いようです。学校側にもっと協力してもらっては良いかと思えます。昨年より仕掛け絵本になっていて喜んでいきます。
- ・ 幼稚園でやっていた時のほうが本や教材を楽しんでやっていたような気がします。現在はやり始めると楽しんでいますが、お友達と皆で遊びながら教材を楽しむほうが自ら進んでやっていた。
- ・ 今回2冊目を頂き、私共でもどのように子供と一緒にこの絵本を楽しんだら良いか解らない状態です。子供は CD を聴きながら、声を出して真似をしてみたり、同じ絵を描いたりしています。集中して勉強といった感じではないのですがこれでよいのでしょうか？
- ・ この様に使用すると良い等、使用方法と一緒にいただけるとありがたいです。絵本に関してはとても喜んで見えています。
- ・ 幼稚園のときの生活と違うからなのか、小学校に入ってから宿題もあり疲れてしまうようで、自分からは CD を聞きたいというようなアプローチは殆どありませんでした。しかし、CD をかけ始め絵本を広げると、指や目で絵本を追い、声に出し、楽しんでいました。(我が家は3人子供がいて、息子は2番目ですが、末娘(2才10ヶ月)が、CD や絵本にとっても反応し、お兄ちゃんの真似をしていました。)小学校生活が慣れてくれば、また違うのかな?とも思っています。絵本が、仕掛けがあり楽しそうでした！

## 6 児童保護者アンケート結果(二回目)

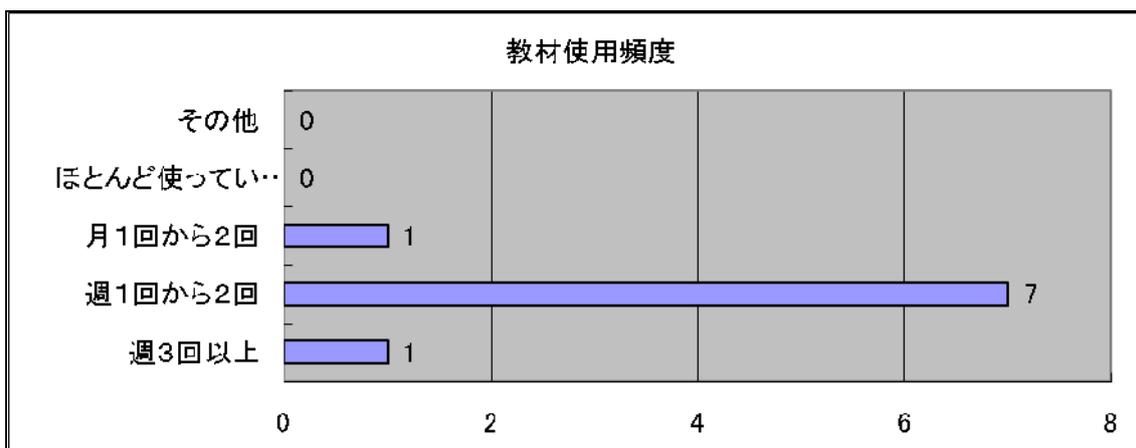
全ての教材の中で、お母様が一番気に入られたものはどれですか。



理由

a	絵が好きなのと、文が短く聞きやすいため
d	子供も知っている曜日の英語なので興味深く勉強できた
	歌をよくうたっていました(おどりながら)
d	見やすかった。子供と話を膨らませることが出来た。エリックカール(Today is Monday)が好きなので。
	良く知っていた曲だったため
e	Knock が入り、ワンクッションあるので、入りやすかったです。
	仕掛け絵本になっていて、親子で CD を聞きながら楽しめたので。
	仕掛け絵本が子供の興味を引いて、絵も素敵だったから。

自宅ではどのくらいのペースで教材を使用されましたか？



この英語活動プログラムを通して、何かお子様に変化等がございましたか。

(絵本やCDについて、幼稚園や小学校での英語活動について、また外国語や外国語の文化について、何かお家で話されたことで印象深かったことなど)

- ・ 英単語に興味を持つようになり、日常でも、これは英語でなんていうの?など質問するようになった。
- ・ 英語だから嫌とかわからないとか言わずに普通に本を見る感覚で楽しんでいます。
- ・ 英語を見ると、「あれは何?」とたまに聞くようになりました。曜日がカレンダーに「MON」と書いてあるのを見て、気になるようになったりもしています。生活の中にすぐある英語から覚えているのだなと思いました。
- ・ 自然と数を英語に言ったり、何気ない時、英語が出る。英語を身近に感じることもある様子。
- ・ 外国人を見ると、「このひと英語を喋る人?」と日本語以外を話す人に興味を持ちました。また、自分から話しかけてみようという様子が見られました。
- ・ 数や曜日を英語で言ってみたり、色の名称を(例えば「緑はグリーンだよ?」)私に話しかけてきたり質問やらすることが、以前より少しだけ増えたようです。”Knock! Knock! Mr. Croc”の飛び出す絵本はとても気に入っていました。
- ・ 本に出てきたことなどを英語で聞いたがったり、興味を持つようになった。英語だからわからないという反応が無くなった。
- ・ 千代田学で頂く本と CD はとても気に入っていて、必ず本を英語教室に持って行って先生やお友達とするのを楽しみにしています。
- ・ 以前は、私から CD を聞こうと声かけをしていましたが”Today is Monday”くらいから自分から早く聞こうと言うようになりました。”Knock! Knock! Mr. Croc”に関しては、絵本に興味を持ち CD を聞かないときにも一人で絵本を楽しんでおりました。

これからもこのような過程での英語活動を続けたいと思われますか。

- ・ 子供に難しすぎずに勉強できるので、是非続けたいと思います。
- ・ 活動をしている仲間とアウトプットする機会があれば続けたいです。
- ・ 少しずつになるけど、思います。
- ・ 続けたい。
- ・ 子供にとって無理の無い様、楽しみながら続けて行きたいと思います。
- ・ 続けてみたいです。しかし、学校の宿題でいっぱいいらしく、中々習慣的に行えてないのが残念です。(むしろ、下の子(3歳)の方が、絵本を引っぱり出してよく見ていました。)
- ・ 機会があれば続けたいと思う。
- ・ 昨年の教材も繰り返し使っていきたいです
- ・ 音楽や絵本が違うだけで子供の興味の示し方も全く違っておりました。話す声の音が小さくもう少し音楽と同じ位の音量であつたら良かったと思います。

## 付録 2

# 千代田学レクチャーシリーズ



## 親から子どもへ ～ 英国での子育てと絵本の読み聞かせ

－ 英国大使館 参事官 アラスター・モーガン氏 －



大妻女子大学短期大学部英文科（三番町12）では、6月27日、大妻女子大学A棟3階教室で、幼児がいる家庭での英語活動支援のための講演会を開催しました。

この講演会は、「千代田学」事業プロジェクトの一環として行ったもので、講師に、英国大使館対英投資ダイレクター貿易政策参事官のアラスター・モーガン氏を招いて、英国における子どもへの絵本の読み聞かせやナーサリーライム（童謡）の伝統などについての講演が行なわれました。

講演会には、区内の幼児の保護者や大妻女子大学の学生など約120名が参加。アラスター・モーガン氏自身が子どもだった頃、読んでもらった絵本の話から、親として、子どもを寝かしつける際の絵本の読み聞かせについての話し、本で習う唄としてではなく、親から子へ伝えるナーサリーライム（童謡）の伝統についてのご自身の経験を踏まえた話しに、参加者は熱心に耳を傾けていました。



大妻女子大学短期大学部英文科では、「家庭と保育施設（幼稚園）との連携による、幼児英語教育活動プログラムの開発」として、「千代田学」の研究プロジェクトを行っています。

今回の講演会の他、英語教材を活用して、幼い時から、異なる言語や異文化に触れることによるこどもの社会性や対人能力の発達を促す事を目的に、千代田区立お茶の水幼稚園（千代田区猿楽町1-1-1）と連携しています。年間を通した幼児英語活動プログラムを作成し、月に一度、英文科の先生が出向き、英語教育を行っています。

## アラスター・モーガン氏講演会感想

伊藤恒子

「千代田学」プロジェクトの一環で、英国大使館参事官アラスター・モーガン氏による《親から子に伝える英文学の伝統～イギリス家庭における子育てと絵本》と題する講演会に参加させていただきましたが、内容はモーガン氏ご自身の幼時の絵本体験や、親から子に伝えるナーサリーライム（童謡）の伝統について、そして3人のお子様のお父様として就寝時に絵本の読み聞かせをされたことなど、絵本を通じて子育てに携わっていらしたその楽しい体験談、思い出のお話で、これまで私が参加してきた「絵本の読み聞かせはお母様がするもの」という視座での絵本講座とはひと味違った、とても新鮮な印象の講演会でした。

それはモーガン氏が常日頃深くお子様の育児や教育に関わっていらした、氏のよきお父様ぶりが想像される地に足の着いた教育論で、嫉妬のためにはお尻ペンペンも辞されなかったこと、ポットトレーニングについて、ご姉妹に似たお名前を付けたのは呼ぶときに間違えやすく失敗だった、などのエピソードも語られて、会場には何度も笑いが広がりました。

絵本についてのお話で興味深かったのは、日本でも有名な B.ポターの『ピーターラビット』と A.A.ミルンの『くまのプーさん』を例に挙げて、前者は絵が美しく、しかし後者はストーリーも文章もとても上手く、半分おばかさんで半分哲学者のプーの常識や物の見方が変わっていて面白く深い洞察がある、と述べられたことで、今度プーさんにお目に掛かったときには是非、モーガン氏の見解を思い出して楽しんでみたいと思いました。

また、この講演会で最も素晴らしかったのは氏の絵本の朗読で、《CAT IN TILE HAT》と《ONE MAN WENT TO MOW》を選ばれて、韻を踏んだその文体をリズム感に満ちた演技で再現されましたが、美しく選び抜かれたことばで書かれた絵本を沢山持つ私どもも、こうした文化をいつまでも大切にしていかなければとの思いに至りました。そして日本では、「お父様とは何をして遊ぶの？」＝「公園で～」が定番ですが、「お父様に絵本を読んでいただく」とお答えになるようなお子様のいらっしゃる素敵なお家庭を、ご参加の次代を担うお若い皆様には築いていただきたいと願うところでございます。

モーガン氏には子育て時代の珍しい絵本も沢山拝見させていただき、有難うございました。

## メキシコ・アメリカで経験した親子の触れ合い

-日本人にも学んでほしいライフ・スタイル-

- 演劇プロデューサー 渡辺三千代氏 -



大妻女子大学（千代田区三番町12）では、「メキシコ、米国で経験した親子の触れ合い」-日本人にも学んで欲しいライフ・スタイル-の講演会を行いました。

この講演会は、千代田学の一環として行ったもので、講師が、メキシコとアメリカでの親子関係のあり方や子育ての実情など、海外での自らの体験を知ってもらおうと行ったものです。

講師は、「自殺やいじめ、家庭内暴力など、日本社会のゆがみは、家庭での堅実で平和な幸せの営みが歪んでいることが第一の原因ではないかと考えられます。家庭での親子の触れ合いの貧しさも問題となっています。メキシコ市に住み、教師の経験から、たとえ貧しくとも、「夢」を持ち、言葉を使って楽しみを与え合うという習慣と文化が重要ではないかと思えます。親子で、夫婦で、恋人と、言葉を楽しみ、言葉に親しむことを実践してみてください。」と、区民や学生ら詰めかけた100名を超す参加者を前に語りかけるように話していました。

参加した区民は、「もっと子どもと、夫婦で話すことが大切なんですね。自分を振り返る良いきっかけとなりました。考えさせられました。」と話していました。

(千代田区HPより [http://www.city.chiyoda.tokyo.jp/press/release/20061110/1110\\_2.htm](http://www.city.chiyoda.tokyo.jp/press/release/20061110/1110_2.htm))

## 渡辺三千代氏講演会感想

輸入書籍販売 S・I Book Service 代表  
町田米蔵

「メキシコ・米国で経験した親子のふれあい」と題する渡辺三千代氏の講演会に出席して第一に感じた事は聴講の学生、一般人の教室からはみ出る程の人数の多さだった。第二は女性として、国際人としての渡辺氏のど迫力(仙台から駆けつけてすぐ講演)には驚いた。

内容的には未来像が全く欠けた現在の日本を思いながら、メキシコでは何事にも“夢”を持つということが毎日の生活の中で生まれ、守られているかと言う事、更に個々人に対しては抑圧しない、自由な空気の中で伸び伸び育てる等のライフ・スタイルに羨ましさを感じた。

翻って、飽食の時代の日本の教育は若者たちに夢を与える教育、と同時に耐える強さを植えつける政策が急務と痛切に感じた。

このような各国のライフ・スタイルを聴かせる講演会や外国人による音楽会等は年々充実して次回の楽しみを増幅させてくれる。

これは一重に大学と運営する母体がうまくかみ合っ前向きの企画を考えているからだと思う。今後も積極的に毎回出席したいと思います。

## インドでの親子の触れ合いと子育て事情

ー 駐日インド大使館 Dr.ジューヴァン・ラタ・シャクラ氏 ー



大妻女子大学短期大学部英文科では、2007年7月3日、「インドでの親子の触れ合いと子育て事情」をテーマに講演会を行いました。

この講演会は、千代田区が区内大学と連携し、調査・研究事業を支援する、千代田学の一環として行ったものです。講師には、駐日インド大使館からインド文化普及のために招聘された女性研究者・ジューヴァン・ラタ・シャクラさんを招いて、インド社会の親子関係のあり方や子育ての実情を国際人として活躍する女性（母親）の視点から講演を行いました。

ジューヴァン・ラタ・シャクラさんは、「インドでは、母親の胎内にいる胎児と話すことから子育てが始まり、出生や命名など子どもの成長に合わせた儀式があり、この命名の儀式ではヒンズー教と深く関わる占星術で決められていく。他にも、子の成長段階に応じて行われる、十代の儀式や結婚の儀式などが紹介され、近代化が顕しいインドにあって、伝統的なものを大切にしながら共存・両立している。」と、区民や学生ら詰めかけた100名を超す参加者を前に語りかけるように話していました。

参加した区民は、「インドにも日本と同じように子どもの成長に合わせた儀式、例えば“お食い初め”のようなものがある聞いて、とても興味深かったです。」「インドの子育ての実情を聞くことで、日本とインドとの違いや共通点を発見することができました。」と話していました。

千代田学レクチャーシリーズ1 東京ケーブルネットワーク  
**インドでの親子の触れ合いと子育て事情**  
インド社会における親子関係のあり方や子育ての実情を国際人として活躍する母親の視点から講演します！  
**7月3日(火) 13:10~14:30 入場無料**  
**大妻女子大学A棟366室**  
◆講師: Dr. ジューヴァン ラタ シャクラ氏  
申込み 大妻女子大学英文研究室  
chiyodagaku@otsuma.ac.jp ☎5275-6068  
ケーブルTV (東京ケーブルネットワーク)

(千代田区HPより <http://www.city.chiyoda.tokyo.jp/service/00085/d0008582.html>)

## シャクラ先生講演会感想

辺見和可子

7月初めの夏を思わせる日の午後、大妻女子大で行われた、大妻女子大学千代田学主催レクチャーシリーズ3に出席した。

講師は40代半ばの黒い髪と黒い目を持つ美しいインド人女性。濃いピンクのシャツの上にシルクの白い地に薄い茶色の小さな模様が入ったサリーをまとっていた。普段はヒンズー語を使っているのに、英語だと言いたいことが十分伝わらないかもしれないと言いながら、流ちょうな英語で話をしてくれた。

演題はインドの育児についてだった。特に印象に残っているのは、母親が子どもに読んで聞かせる話のくだりだ。講師はいくつかの物語を紹介した。驚いたのは、私も、出席した多くの女子大生もそれらの物語のほとんどを知っていたことだ。インドでも日本でも、昔から子どもに聞かせているのは同じような物語なのである。どのようにして伝わってきたのかと考えると興味深い。

物語は、たとえば『狼少年』。「狼が来た」と村人に何度もうそをつくうちに信用されなくなり、本当に狼が来たときには誰からも助けが得られなかった話。『金の斧と銀の斧』もあった。貧しいきこりが沼に斧を落として嘆いていると、金の斧を持った神様が現れた。神様が、「これはおまえの斧か」と聞くと、きこりは「違います」と答えた。次に銀の斧を出されても、きこりは「違います」と言った。最後に鉄の斧を出すと「はい、それは私のです」。神様は正直者のきこりをたたえ、全部の斧を与えたという話。正直は素晴らしいと教える教訓的な話である。親はこのようにおとぎ話に託して子どもに正直が大切であることを伝え、正直者に育つように心を砕いている。

そのような話を聞きながら思った。時々、子どもをバギーに乗せながら、携帯に心を奪われている若いママの姿を見かける。彼女達は子どもに本を読んで聞かせることがあるのだろうか。子どもと目を合わせて話をする時間をもっともってほしいな、と思う。

私は今回初めて大妻女子大学を訪れた。会合の名前も、開催場所もうろ覚えで心もとなかった。1階の周知板を見ても分からず、門の近くまで戻り、おそるおそるガードマンに聞いてみた。「千代田区主催の講演会で…」と言うと、ガードマンは即答。「あーインド人の方の講演ですね」と会場を丁寧に教えてくれた。それでも、私は大学内でまた迷った。その階にもガードマンの窓口があったので、再度尋ねたところすぐ教えてくれた。知らない場所に行くのは緊張するものだ。行事の周知が徹底していて、全部のガードマンがちゃんと把握してくれていたのが助かった。

## 現代に生きる「ハムレット」

— 青山学院大学名誉教授 青山誠子先生 —



標記の講演会が、2008年1月16日（水）14時40分より、A棟264室において開催された。講師は青山学院大学名誉教授青山誠子先生（写真）、演題は「現代に生きる『ハムレット』」。

シェイクスピアの生きた近代初期のイギリスは新旧の世界観・価値観の交錯する複雑な時代であった。『ハムレット』はそうした複雑な時代を反映した複雑な作品である。青山先生はこの作品を多元性のドラマとしてとらえ、＜多元性＞をキーワードに、主人公ハムレット・ことば・演劇・観客反応などについて、また、世界文化としてのシェイクスピア劇について興味深い話を展開。会場にあふれるほどに詰めかけた聴衆を魅了した。

その後、本館6階610室に会場を移し、先生を囲んで、なごやかな歓談の会が催された。ともに充実した楽しい会であった。（文責：田口孝夫）

ケーブルTV（東京ケーブルネットワーク）での告知

大妻女子大学・千代田学 後援 東京ケーブルネットワーク  
**大妻女子大学 英文学会講演会**  
■講演：現代に生きる『ハムレット』  
■講師：青山 誠子氏（元青山学院大学教授）  
**1月16日(水) 14:40~16:30**  
**大妻女子大学 A棟264教室**  
終了後、レセプションがあります **入場無料**  
【申込み】大妻女子大学英文研究室  
✉ chiyodagaku@otsuma.ac.jp ☎ 5275-6068

## 知的刺激の貴重なひと時

出沢正子

1月16日は大妻女子大学で青山学院大学名誉教授青山誠子先生による講演、「現代に生きる『ハムレット』」を聴いた。

それまで実際に当大学「千代田学」に足を運んだのは2007年6月の「ローナン・マギル ピアノコンサート」のみである。

それでも、例えば2006年10月のインターナショナル・シアターカンパニー・ロンドンによる「英語劇『フランケンシュタイン』観賞の夕べ」や、短期大学部英文科の意欲的な取り組み「幼児の保護者を対象とする講演会シリーズ」の好評判は伝え聞いていたから、本講演もかなり質の高い内容であることは十分予想でき、そして結果は嬉しいことに、期待以上だった。

そもそも私にとってのシェイクスピア文学は、少女時代に、その特に有名な戯曲のいくつかを物語化したものしか読んだことが無い。

ハムレットもそのうちの一つで、大体のストーリーを把握している程度、しかも思春期の心には、主人公の頗る優柔不断な性格が不可解で、とても好きにはなれなかった。

それでも、創作から何世紀も経た今日に至っても、英国はともかく、世界中で演じられているシェイクスピア、その中でも最も多く演じられるハムレットの魅力とは何なのだろう。

実はロンドン滞在中に、話の種に一度だけ舞台を観に行ったことがある。はっきり聞き取れた台詞は、有名な「to be, or not to be …」と「to a nunnery!」くらいで、悲しいかな、こういう芝居にはつきものの洒落たユーモアは、廻りの英国人が笑って初めて気がつく始末。これもあまり良いイメージでは無い。

それが、今回の講演でかなりの部分が明らかになったような気がする。シェイクスピアの生きた時代の歴史的背景、その文学、主人公ハムレットの性格の多元性・・・青山先生の講義は、特にその組み立てが素晴らしかった。

ルネサンス期のオリジナルのそれは無理にしる、ここはいつか一度腰を据え、原語で戯曲を読んでみなければという気持ちにさせられた、知的刺激の貴重なひと時だった。

遠く昔を振り返れば、体育会系部活にいれ込んで、大分いい加減な学生時代を過ごしてしまったと、反省することしきり。満員の教室に足を踏み入れ、若く可愛い学生さんたちのエネルギーを肌を感じながら、一緒に講義を受けるのも新鮮。

是非また足を運びたいと思います。